

一旗本家の目から見た近世国家

—— 一旗本日向家の事例（一）——

望 月 秀 人

要 旨

本稿は一つの旗本の家の歴史を通して、日本の近世国家の在り方を考察しようとするものである。私は西洋近世の複合国家論に関心を持っているが、近年そうした観点から日本史や東洋史との比較を志向する研究動向も見られる。ただし、それぞれの分野に固有の事情も多く、比較研究の困難も露呈している。以上を踏まえ、本稿では旗本日向家に視野を限定し、その視点からまず日本と西欧の近世国家の異同を具体的に考えたい。その上で、日本の近世における複合国家的要素と領主制的要素を共に考察することで、より複合国家概念を明確にすることを試みたい。今回の（一）ではそのための予備的作業として、まず旗本日向氏の系譜を概観し、今後登場する人物、地名、史料について概観したい。

キーワード：旗本、複合国家、武田遺臣、近世、国奉行

目 次

はじめに

第一章 旗本日向家の系譜と所領について

第一節 武田家臣日向大和守家

1. 秋山敬論文の意義と課題
2. 日向大和守の「子孫」たち

第二節 武田家臣日向玄東齋宗立

第三節 徳川家旗本日向家の系譜

1. 始祖日向半兵衛政成（正之）
2. 日向半兵衛政成の系譜と所領（以上、本号）

第二章 旗本日向家の活動の多面性（以下、次号）

第一節 初代日向半兵衛政成と国奉行制

1. 徳川家の五か国支配

2. 豊臣包囲網としての国奉行制
3. 国奉行の諸活動
4. 徳川家の天下

第二節 旗本日向家と江戸

第三節 旗本日向家の所領経営

終章 まとめと課題・展望

はじめに

本稿は旗本日向家関連の史料をもとに、近世国家の実像にどれだけ迫れるかを考察するものである。旗本日向家といっても、始祖の半兵衛が伊勢や甲斐の国奉行となったことを知っている人がどれだけいるのか、というような知名度であろう。そのような家を、西洋近世史研究者である私があえて取り上げるのには、個人的な理由が大きく関連¹しているが、学問的には以下のような事情がある。

私は西洋近世史研究を進める中で、複合国家論に関心をもって、現在に至っている。複合国家論とは、文化的・法的に異なる諸地域を単一の王権ないし政府が同君連合や連邦制のような形で統治している国家の在り方を考察することで、近代国家を問い直そうとする研究動向のことである。その研究史上の意義づけについては既に別稿でふれたが、未だ複合国家論については近代国家の問い直しのための多様な事例提供という以上の意義づけは難しいと私はみている²。近年の研究動向を見ていると、法制度の整備の程度による新たな時代区分の動き³と、日本史・東洋史・西洋史を通じた共通の議論の土台設定を目指しているらしいが、いずれにせよ地域差も大きく、簡単に総合が可能とも思えない⁴。とはいえ、私自身も西洋近世史と比較する意味から、日本の中近世史に大きな関心を寄せてきた。戦国大名の中には、広大な領国統治の際に支城制を採用し、諸地域の事情に合わせた統治を心がけた存在も多い。徳川家康も、五か国統治時代から各地に奉行を設置して、より地域的事情を考慮した統治に配慮し始め、さらに関ヶ原の合戦以後には、豊臣家に代わる豊臣政権の継承者として、国奉行制を本格的に活用している。日向氏を含む徳川家の旗本については、これまで多くの研究が蓄積され、知行制の在り方や代官職とのかかわりなどが考究されてきた。地域史研究の進展により、多くの事例が紹介され、現在では個々の旗本家の在り方もある程度具体的にわかるようになってきている。日向半兵衛の代官としての活躍を、そうした研究を踏まえて位置づけなおすことで、西洋近世史との比較も可能になると思われる。

旗本日向家については、これまで地方史や国奉行研究⁵の中で少々言及される程度であったが、近年見るべき学問的成果がいくつか登場している。決定的であったのは、『戦国遺文 武田氏編』⁶と『須玉町史』の刊行を前提に書かれた、後述する秋山敬「日向大和守の系譜」（2002年）で、日向大和守とその一族である日向玄東齋（旗本日向家の祖）に関する同時代史料が網羅的に

紹介・分析されたことであるが、それに加えて山本管助一族の研究が近年進められる中で、日向盛庵（半兵衛政成）関連の新史料が発掘されたことも大きい。以上の学問的成果を踏まえ、再度私自身の調査をもとに、後代の資料まで含めた日向氏研究の現状を総括して今後の課題を明らかにし、加えて特に日向半兵衛政成に注目しながら、西洋近世の複合国家と江戸幕府との異同を考え、さらにやや後代の史料になるが、知行支配の在り方にも注目することで、複合国家論の理論的な射程をより明確にしたいというのが、本稿を著す意図である。

また、もう一つ付け加えたいことは、近年の研究動向の検証である。近年、地域研究が進んで通説の再検討が進んでいること自体は、私も研究者として歓迎している。ところが私見では、自身の研究を意義付けたいために、過剰なまでに通説を罵倒する研究者が増えている感が強い。最もわかりやすいのは、黒田日出男による『甲陽軍鑑』再評価に関する論文⁷である。同論文では、あたかも戦前の田中義成によるいいかげんな5頁強の論文が、学会の権威主義ゆえに近年までずっと検証もされずに通説化してきたかのような書き方をしているが、そもそもその最初の論考は、すぐにその弟子渡辺世祐によって検証されて部分的に批判されて継承されており、その後も『甲陽軍鑑』の校訂者によって検証されている。むしろ、その後の研究で修正された史実も多いが、それは学問の発展にはつきものであり、従来の研究者の怠慢を意味しない。また、黒田の望むような、「甲陽軍鑑のテキストとしての性格の分析」にまでは、従来の研究者の考察が至っていなかったのかもしれないが、それは問題関心の違いにすぎない。実際のところ、『甲陽軍鑑』に史実の誤りが多いことは周知のとおりであるし、黒田の言うほど『甲陽軍鑑』が武田家研究において無視されてきたわけでもない。本稿では、こうした行き過ぎた通説批判にも警鐘を鳴らし、現状での研究の小括を目指している。

第一章 旗本日向家の系譜と所領について

まず、本稿で登場する人物や地名、史料についての位置づけを明らかにするために、旗本日向家の系譜と知行地の変遷を概観したい。

第一節 武田家臣日向大和守家

1. 秋山敬論文の意義と課題

旗本日向家の系譜を考察するにあたって、まず検討すべきは武田家臣日向大和守家との系譜関係であるが、この点については秋山敬「日向大和守の系譜」⁸が決定的に重要である。この論文は『武田氏研究』第25号（2002年）に発表された後、一部補訂の上で同氏の『甲斐武田氏と国人——戦国大名成立過程の研究——』（高志書院、2003年）に収録された。この論文は、秋山氏が大和守の所領の一部があった須玉町（山梨県北杜市）の町史⁹に関わったことから、史料に見える日向大和守が実は二人の人物（多分親子）を指していたのではないか¹⁰ということを論証するために執筆したものであり、この時点での村山郷の日向一族に関する同時代史料を、玄東斎に

ついでのものまで含めて網羅して検証している。氏の論証は概して説得的であり、これ以後の日向氏研究の基盤となっている。日向大和守家については、基本的にこの論文をご参照いただくとして、本稿では記述を制限したい。

ただし、本稿との関連を考えたとき、この論文にはいくつかの問題点も指摘しうる。第一は、著者はまず同時代史料をもとに史実を明らかにするという、歴史研究者として適切な態度を貫いたがために、たとえば織田信長への徳姫書簡¹¹のような、有名だが後世の捏造の疑いの強い文書は最初から考察の外においている。しかし『甲陽軍鑑』における創作記事の問題¹²も含めて、このような史料の存在は、「虎頭は著名人ではなく、後世わざわざ彼の名前で願文が作製される必然性は薄い」という註26の指摘¹³と齟齬をきたすがゆえに、実は検討に値する点であるように思われる。

また第二に、この論文では日向大和守・玄東斎の系譜の復元を試みており、その後の武田家臣研究では基本的にそれが踏襲されているが、玄徳斎宗栄＝大和守是吉という系図の記述は単純な誤記¹⁴としても、大和守と玄東斎との関係が問題である。秋山氏は『寛永諸家系図伝』¹⁵や『寛政重修諸家譜』¹⁶を引用しつつ、「玄東斎の祖母で、日向大和守の母でもあるという条件を満たすためにはいくつかのケースが考えられるが、二人いるうちの子の方の右京亮の妻が日向大和守¹⁷の娘であったとするか、大和守の兄弟を養子（子の右京亮に相当）としたと考えるのが最も合理的であろう」¹⁸とするのだが、家系図では後者の説をとりあえず採用している。これがその後の武田家臣研究では定説化し、新津右京亮某—右京亮某（日向大和守是吉の弟）—玄東斎宗立某—半兵衛政成という系譜が想定されている¹⁹が、秋山氏が「いくつかのケース」を想定していることも、改めて確認しておきたい。

2. 日向大和守の「子孫」たち

日向大和守虎頭には、藤九郎昌成と次郎三郎某という息子がいたことが、同時代史料から判明している。前者は奥近習五人の内の一人²⁰で、横田十郎兵衛と並ぶ鉄砲の名手とされ²¹、倉賀野城攻めの際、永禄7（1564）年5月6日に討ち死にし²²、後者は武田家滅亡の際、父とともに大島城からの逃亡を余儀なくされた後、父虎頭、母晴雲院殿、伯母（虎頭姉）天入院殿とともに、天正10（1582）年3月13日、所領の村山（山梨県北杜市）で自害した²³。そのほか、大永8（1528）年比志神社本殿造営棟札から推定される虎頭の兄弟²⁴を除くと、玄東斎の妻となった大和守虎頭の妹もいたとされる²⁵。

このようにして滅亡した日向大和守家の所領は、その後の天正壬午の乱の過程で、徳川家康から津金衆棟梁2人に与えられた。小尾監物祐光には本領に加えて新知行として「村山郷貳百貫文・三蔵郷五十貫文・比志郷十三貫文」が「玄徳斎分之内」から与えられ、その実弟である津金修理亮胤久にも「村山郷二百貫文・三蔵郷五拾貫文・比志郷拾貫文」が「玄徳斎知行分」から与えられている²⁶。

この津金修理亮胤久が「日向大和守ノ婿ナリ」²⁷と『甲斐國志』に書かれている。同書によれ

ば、胤久は胤時の嫡男或いは二男で、後に徳川義直に仕えて尾張藩に移り、「遺老物語ニ大坂冬御陣ニハ尾州ノ御家中津金修理夏御陣ニハ息三郎左衛門其組召連レ來ルトアリ」、助之進という子息もいたという²⁸。これが事実であれば、大和守の女系の子孫が津金氏を継いだ可能性もあろう。また胤久の弟に跡部又十郎久次、妹に尾張藩士井出兵部室がおり、「三枝系圖ニ三枝監物吉親ノ女又十郎ニ嫁ストアリ男又十郎胤信慶長中甲府城番ノ列タリ給貳百七拾石」というが、後述する三枝氏との関係が未だ不詳である。

ところで、比志にはもう一人の日向大和守が存在したという遺跡がある。それは比志村の白龍山徳泉寺にある墓碑であり、そこには日向大和守源朝臣兼繁の名があるのである²⁹。この徳泉寺は『甲斐國志』では、「大永二年日向大和守創造、法名徳泉寺殿花屋宗英居士元亀元年八月卒ス牌子ノ裡ニ日向大和守源朝臣兼繁ト刻セリ其外数人ノ法名過去帳ニ載セタリ古墓アレトモ年號詳ナラス」と書かれている³⁰。ただし、この没年（1570年）や諱に合致するような大和守の存在は未だ確認されていない。

ところで、日向大和守の娘の一人は、実はよく知られた事件の史料において登場する。それは徳川家康の人生における最大の悲劇として知られる、武田家内通疑惑による正室築山殿の殺害と長男信康の切腹という事件の関連史料である。この事件は一般に、信康の正室徳姫が父織田信長に送った告発状がきっかけで起こったとされる³¹が、『改正三河後風土記』によれば、この告発状の一節に、信康が日向大和守の娘（昌時妾腹の女）³²を側室としたことが挙げられているのである³³。ただし、この史料は使われている文言から後代の作とみなされ³⁴、秋山論文では無視されている。また、このような諜報がらみの事件であれば、本来武将として知られた大和守よりも、諸国御使者衆である玄東斎の方が関係しように思える³⁵が、そうでないところが気にかかる。

そのほかにも、日向大和守の子孫がいたという史料がある。たとえば、尾張藩士三枝家に関する史料³⁶によれば、日向大和守昌時は子息藤九郎昌成を亡くした後、武田信玄の弟逍遙軒の子三枝新蔵左衛門信喜を養子に迎えたのだという。この日向信喜は村上義清の娘を妻とし、大蔵（新左衛門・新八）信正らを生んだ。この日向大蔵が徳川家康に仕え、所領安堵状を付与された³⁷が、彼は後に三枝姓に戻る。彼の息子のうち、孫市信時のみが日向姓を名乗っているが、新蔵信昌らほかの兄弟は三枝を名乗っている。この信昌の子が槍術に秀でたことで知られた三枝新八信清（栄松院信清日東信士）であり、彼の墓は名古屋市平和公園内の寿量山妙本寺霊苑内にある、名古屋市指定名家墓碑区域に残っている。彼のひ孫新蔵信定と養子又吉の家はかつての相応寺の南側（現在の愛知商業高校の北側辺り）にあった³⁸。こうした伝承は興味深いが、日向氏の養子に入った信玄の甥という記述は同時代史料には見られず、日向大蔵の所領安堵状も18世紀に編纂された尾張藩士系譜集『士林派回』が初出とみられるため、いささか信憑性に乏しいと思われる。

また、会津藩士日向氏10家も大和守の甥を始祖とするという。すなわち、日向大和守の弟真篠遠江守の女婿真篠（日向）出雲守次房（勘太郎、斉庵）は武田家に仕えた後、保科家に仕え、息子半之丞次吉は初代会津藩主保科正之の母方のいとこ（竹村氏）と結婚した縁で城代にまで出

世したが、その息子半之丞次直の時代、天和2（1682）年に妻の甥車源太左衛門の不祥事で苦悩し、息子軍兵衛はいとこ源太左衛門を殺害し遺体を寺に放置した廉で切腹を命じられ、半之丞は改易されて真篠大頭と改名して余生を過ごしたという³⁹。こうして嫡流は改易されたが、庶流はそのまま繁栄した。すなわち、半之丞次吉の兄弟兵左衛門次盛の系統からは伝吾盛喜、造酒蕃狩の2系が、次吉の子三郎右衛門次俊の系統からは織部次華、衛土方忠、仁右衛門次虎、市右衛門次義、新兵衛次宣、新治次孝、小右衛門俊忠の7系が、次吉の子息与惣右衛門次重からは1系が出て幕末に至った。このほかに、系統を異にする日向栖安徳本の子孫が二系統あるが、それは除外する⁴⁰。

会津藩といえば、幕末に朝廷と幕府に尽くしながら、一転して戊辰戦争において朝敵とされ、悲劇的な戦闘を行ったことで有名であるが、会津藩士日向家もまた例外ではない。1868年5月1日の白河口の戦いでは、家老西郷頼母の指揮のもと会津藩は大敗し、朱雀一番足軽隊中隊頭日向茂太郎は中山で官軍に狙撃されて戦死し、その隊員は西郷村大字米に退却した。6月26日から日光口の戦いでも、日向内記（織部次華系統）砲兵隊が参加したが敗れ、内記はその後白虎二番士中隊の隊頭となるが、藩主松平容保兄弟とともに鶴ヶ城を出陣したものの、新政府軍の進撃の速さに戦闘の時期を逸し、内記が他の部隊と連絡をとりに行って不在の時に隊員が戦闘に巻き込まれてしまい、例の飯盛山での「白虎隊の悲劇」（8月23日）を生み出すことになった⁴¹。

しかし悲劇はそれで終わらない。日向与惣右衛門系の日向（内藤）ユキ（芳子）（1851～1944）は「萬年青」という手記を太平洋戦争中に残したが、それによれば彼女は父左衛門と兄新太郎を8月の会津城下の戦闘で失っており、その遺体を悲惨な形で発見している。彼女の母ちかは飯沼家の出身であり、白虎二番士中隊唯一の生き残り飯沼貞吉はいとこに当たる⁴²。ちかの姉千重子は家老西郷頼母の妻であり、8月23日に新政府軍が会津城下に乱入した際、頼母の母律子、その母小森ひで（諏方伊助頼故の女子）、頼母の妹眉寿子、由布子、娘細布子、瀑布子、田鶴子、常盤子、季子、ひでの孫小森駿馬夫人みわ、その子千代吉ら一族20人ほどとともに集団自決を行っている⁴³。幕末までいきなり話がとんでしまったのは、やや突飛に思われるかもしれないが、このように日向大和守の「子孫」は、思わぬところで日本史の大事件にかかわっているわけである。

幕末のことはさておき、家祖の日向次房に話を戻すと、やはり次房に関する武田家の同時代史料はなく、私が見た史料も18～19世紀に編纂されたものである。たしかに日向氏が早くから会津藩で重要な役目を担ったことは事実のようだが⁴⁴、それも保科正之の生母との縁のようである。

以上は地方の藩士となった「子孫」の事例だが、それに対して帰農した「子孫」の事例も存在する。それが三條日向氏の事例であり、子孫である酒井（日向）力氏が自作の『佐久文学火映』で自家の史料をもとに紹介している⁴⁵。それによれば、日向大和守正時の長男土佐守あるいは藤九郎の子孫が、武田家滅亡時に逃げて生き残り、信州佐久地方の三條地域に定着してそこを開拓したのだという。三條日向氏は17世紀からその地域の庄屋を務め、多くの貴重な地域史料を所蔵している。場所的にも日向大和守と何らかのかかわりがあってもおかしくないと思われる

る。ただ、同家に残る大和守家との関係を示す史料は元禄時代以降のようであり、これもまた同時代史料に欠けるうらみは残る。また、同家の史料で大和守と玄東齋の系譜関係に混乱が見られることも気になる。

その他、同族とみられるものに、比志村の比志氏がある。『甲斐國志』に「本村小尾ノ續ニアリ蓋シ其黨ナリ本朝三國志天正壬午三月信州高遠戦死ノ中ニ飛志越後守ト云者ヲ載ス又比志神社大永中ノ棟札ニ日向氏ニ並ヘテ越後守ト記セリ同族ノ如シ其子孫後ニ比志氏ト稱セシニヤ同村如意寺ノ記ニ比志民部右衛門ノ開基ナリ法諡ハ正安道歌居士寛永元甲子年トアリ」とある⁴⁶。

以上のように、近世史料には予想外に多くの日向大和守の「子孫」に関する記述が残るが、同時代史料で裏付けが取れないものも多い。むしろ、山本菅助の事例のように、未だ史料が出てきていないだけだという可能性も高いし、私が知らないだけなのかもしれないが、徳姫書簡のように明らかな後代の作もある。だとすれば、なぜ日向大和守のようなマイナーな武将の史料を後代に偽作する必要があったのだろうか。

考えられる可能性としては、第一に『甲陽軍鑑』が江戸時代初期に流行し⁴⁷、その中では日向大和守が板垣信形らと並ぶような高い評価を受けていたこと⁴⁸で、とりわけ甲斐・信濃周辺に出自をもつ日向姓の人間の関心を引いたことが想定される。また第二に、旗本日向家は玄東齋系であり、大和守系は既に滅亡していたために、史料を偽作しやすかった可能性がある。前者ではなく後者に後代の史料が多いのは、そのためではなかろうか。

第二節 武田家臣日向玄東齋宗立

日向玄東齋（1522?～1608）の俗名は伝わっていない。『寛永諸家系図伝』でも名は某である。「身延祖師堂過去帳ニ慶長十三戊申八月十四日宗立日明」⁴⁹とあり、法名は宗立であるが、「凡本州人除髮シテ法名ヲ記ス時又稱氏者無カリシニ日向玄徳齋、同玄東齋、城ノ意庵三人記氏ヲ見ル或人云彼三人ハ浮屠者流ニ非ラスシテ自ラ薙髮シテ雅名ヲ為號ノミ法名ニハ非スト今尚此類多シ」⁵⁰と『甲斐國志』は記している。

彼は上記の通り、上杉家臣新津右京亮の息子であるが、祖父と32歳の父が信州岩村田で戦死し、「幼少にして父母にはなれ」たことにより、祖母（日向大和守の母）の家で養われ、新津を日向に改姓したとされる。多分に父が大和守是吉の弟か、或いは母が大和守是吉の姉妹だったと思われる。ただし、気になるのはこの新津家の出自⁵¹である。一般に玄東齋系日向氏は信濃出身⁵²とされるのだが、日向氏を名乗ったのは玄東齋以来であり、また新津家は上杉家臣である。上杉家は関東から北越にかけて一族を分出しており、信濃にまでしばしば出兵していることは事実であるが、この時期に上杉家臣が信濃に定住していたのだろうか。玄東齋の父が戦死した上杉軍の「岩村田の戦い」についても、同時代史料で確認できてはいない⁵³。しかも祖父・父の戦死とともに、新津家が滅亡している感を受けるが、弱小土豪だったということであろうか。疑問は残るが、上杉家臣ではなく、親上杉派の土豪だった可能性も留保したい。

ところで、玄東齋の出自についてうかがえる挿話として、信玄の父武田信虎との対話がある。

『甲陽軍鑑』品第三十三によれば、永禄六癸亥（1563）正月七日、遠州懸（掛）川圓福寺から、「今川氏真公の御機に違なされ」春に上京した武田信虎からの使者が来たため、信玄は「少身なる侍の、信玄公御心やすく思召し、如何も、しまりたる分別ある者」である日向源藤齋に命じて十三日に甲府を立たせた。彼は十七日に圓福寺に着き、その夜信虎に会ったが、信虎から「何者ぞ」と尋ねられたため、以下のように回答した。「日向大和が親類にて候、信虎様甲州御牢人の時分、二十六年以前は、我等奉公もいたさす、日向大和にかかり、歳廿のうちにて候、元來は信濃本國にて候と申上る」⁵⁴。これによれば、玄東齋の出身は信濃で、大和守の親類で、信玄による信虎追放時には20歳未満だったことになる。

ところで、同書によれば、信虎は桶狭間合戦の後、今川氏真に疎まれたとして、今川家の滅亡を画策したとされる。これに対して、信虎父子は駿府では優遇されていたとして批判する見解が出されているが、なぜか彼らがその際に挙げる史料は今川義元在世時の史料であり、『甲陽軍鑑』への批判になっているようには見えない。信虎が掛川に移ったという同時代史料もないとのことだが、彼はしばしば駿府と京を行き来しているため、圓福寺に滞在することがあってもおかしくはないだろう⁵⁵。当座はこの発言を信用しておこう。

ところで、日向玄東齋と玄徳齋（大和守虎頭）の活躍時期がほとんど重なることは、秋山氏も指摘されるとおりだが、玄東齋の具体的な活動がわかるのは、永禄11（1568）年から天正4（1576）年の間である⁵⁶。彼は武田家の諸国御使者衆であり、多分に諜報活動をも行っていた。『甲陽軍鑑』には信玄晩年の「諸国へ御使衆六人」として、重森因幡守（八重森因幡守家昌）、日向源藤齋（玄東齋宗立）、初鹿存喜、秋山十郎兵衛、西山十右衛門、兩宮ぞんてつ（淡路守存哲）の名が挙がっている。丸島和洋⁵⁷氏によれば、初鹿・秋山については不詳だが、八重森は西国方面（毛利氏、本願寺、紀伊雑賀衆など）を担当し、西山は上杉景勝との甲越同盟交渉を担当し、兩宮は上杉家臣北条高広（1571年）、北条氏政、浅井長政、長宗我部元親への使者⁵⁸に立ち、その他、長延寺実了師慶、高尾伊賀守、秋山万可齋、市川十郎右衛門尉なども使者として活動したという。では日向玄東齋の担当はというと、安房里見氏、本願寺、越前朝倉氏、結城氏、多賀谷氏、宇都宮氏、比叡山の担当であった⁵⁹。実際、『戦國遺文』には、そのような同時代文書がいくつも見出される。

永禄11（1568）年7月16日付けで、武田信玄は富山県の勝興寺に書状を出している。それによれば、椎名康胤が上杉家に背いたことで、武田と本願寺門主も連絡を取り合っており、このような時節には「其国静謐之御調略肝要候」であるため、「玄東齋大坂江指上」、金山へは長延寺実了を遣わした。上杉に敵対した本庄繁長の後詰については、八重森から詳細を聞いてほしい、とのことであった⁶⁰。

永禄12（1569）年6月12日付けで、武田信玄は梶原源太政景に書状を出しており、来秋小田原に向かうことについて、玄東齋を通じて里見義弘と談合するため、「路次等指南頼入存候」と書き送っている⁶¹。元亀3（1572）年壬申5月14日、土屋右衛門尉昌統は玄東齋御宿所に宛てて書状を送っている。駿河國小泉郷（富士宮市）久遠寺について、里見義堯より「貴所へ之御状」

を差し越されたので納得し、信玄に取り次ぎ、以前のような御判形を整えるが、身延山と同じ寺号ではいかがなものか、寺号を変えたらどうか、という内容である⁶²。同年7月、妙本寺の日仏から玄東齋に宛てた書状によれば、富士小泉法花堂について里見義堯に「侘言」を言ったところ、玄東齋が土屋昌統を通じて「信玄不入免許之御判無相違候」となったため、会ってお礼を言いたかったが、久留里へご帰宅のために見参できなかったので、村山采女方の口上で詳細を述べ、扇子や名物の吉甫矢などを贈ると書かれている⁶³。

同年11月、玄東齋は朝倉氏への使者を命じられ⁶⁴、その恩賞として11月20日付けで駿河国厚原に70貫文の領地を武田信玄から与えられた⁶⁵。丸島氏によれば、これは年収700万円に相当するという⁶⁶。

天正2(1574)年閏11月に玄東齋は、上野の浦野宮内左衛門尉のもとに出陣を命じる武田勝頼の使者として派遣されている⁶⁷。その後、彼は天正4(1576)年丙子3月初頭の年貢請取証文(面付手形)に今井信衛、小原継忠とともに署名している⁶⁸が、諸国御使者衆であった彼が突然奉行となっている背景には、前年の長篠の合戦での大敗による武田家の人材不足がかかわっているようだ。日向玄東齋は大和守=玄徳齋宗栄と同様、駿河国富士郡大宮にある同国一之宮浅間大社に神馬を奉納している⁶⁹。しかし、天正6(1578)年の駿河浅間神社奉納記を最後に、玄東齋の足跡はその後長く途絶える。秋山氏は「武田氏滅亡前に家督を譲ったのであろう」と適切に推測する⁷⁰。武田家滅亡時や天正壬午の乱の際の彼の動向も明らかではなく、同時代史料には半兵衛とその母は登場しても、玄東齋の名は出てこない。しかし、上記のように1608年までは生きていたとされるのである。ただ、宝暦中に野田成方の書いた『裏見寒話』巻之壹には、「要害城」の項目があり⁷¹、そこには「勝頼没後九年、小田原陣迄は、家康公より駒井右京、日向玄藤齋、同半兵衛、御番相勤」とある。

玄東齋が隠居した一武田遺臣にすぎないとすれば、この時期以降の彼の足跡の空白は単なる史料の不備にすぎないとも考えられるが、もし仮にこの空白に意味があるとすれば、その解釈は二通りあるように思われる。第一は、玄東齋が徳川家に仕えることを忌避した可能性である。彼は幼少時より日向大和守家と密接な関係にあり、その大和守は武田家滅亡時に一家揃って自害し滅亡した。既に隠居の身となった後、一族が滅亡し領土もすべて失う憂き目にあったことは、玄東齋にとっては人生すべてを否定されたような相当なショックであっただろう。その仇敵の一角であった徳川家に仕えて出世していく息子との仲が疎遠になった可能性も否定はできない。実際、徳川家臣でなかったためかもしれないが、彼の実名は息子の時代に作られた『寛永諸家系図伝』の段階ですら某と書かれている。この場合、上記の『裏見寒話』の記述は、玄東齋の足跡の空白を訝って作られた記述ということになる。

第二は、玄東齋がこれまで培った諜報能力を生かして、新たな人生を歩む息子のために、むしろ影の情報提供者となった可能性である。これはうがちすぎな見方かもしれないが、半兵衛が比較的順調に徳川家のもとで出世していることなどを考え合わせると、そのような想定も許されるように思われる⁷²。この場合、『裏見寒話』の記述は真実の一端を伝えていることになるが、い

ずれにせよ、決定的な史料はない。

最後に、玄東齋の妻子について、彼は「一説ニ大和ノ妹婿ト云」、身延祖師堂過去帳に南清院妙立日陽が「日向半兵衛悲母」として、現寶院妙祐が「同人姉」として登場する⁷³。『寛政重修諸家譜』には、政成の姉妹として島次左衛門某の妻が登場する⁷⁴が、同一人物であろうか。1582年の天正壬午の乱の最中、政成が徳川家康に仕官したさい、甲斐国竹居村は彼の母に与えられている⁷⁵が、政成の母は『寛政重修諸家譜』では「某氏」とのみ書かれている。

第三節 徳川家旗本日向家の系譜

1. 始祖日向半兵衛政成（正之）

日向半兵衛政成⁷⁶は玄東齋の嫡男であり、1565年に生まれ、若い頃は傳次郎と名乗り、横田おむつ、三枝監物、大くら新蔵らと共に、武田信勝の御小姓衆24人の内の一人であった⁷⁷。彼の実名については、『甲斐國志』卷之九十六〔日向半兵衛正之〕の項に、「系圖ニ名正成ニ作レリ玄東齋ノ男ナリ諸録同シト雖モ二ノ宮、御岳等所蔵ノ寛永八年八月八日天野傳右衛門清方連名花押ノ書ヲ視ルニ政之トアリ今訂之」⁷⁸とあり、もともと政之だった可能性がある。ただし、『甲陽軍鑑』には彼に関する記述は少ない。未だ若かったからであろうか。『寛永諸家系図伝』でも彼の経歴の始まりは、武田家滅亡直前の、戸（徳）倉城の笠原政晴（北条家家老松田憲秀の二男新六郎）の救援から始まっている⁷⁹。これは伊豆国で天正9（1581）年10月に、北条家の重臣笠原が築城したばかりの城に居座って武田家に内通し、出城山城に戻った北条氏光に攻められた際、傳次郎が先陣を切って出撃し、翌日寄手からの矢文でその武勇を称えられて姓名を尋ねられ、笠原が詳しく記載して送り返したというものである。傳次郎はこの頃から既に父とは異なる道を歩み出している。しかし、武田家は翌天正10壬午（1582）年3月に滅亡し、村山の日向家も後を追って滅亡した。甲斐国は織田家臣川尻氏と武田旧臣穴山氏の、駿河国は徳川氏のものとなった。その際の政成の動向は、父と同様に不明である。

ところが同年6月に本能寺の変が起こり、甲斐・信濃国の支配は再び動揺し、徳川・北条・上杉がそこへ攻め寄せ、領土争奪戦を繰り広げることになる。この天正壬午の乱で日向傳次郎政成は、武田遺臣のネットワークに基づき、徳川家の側に立って参戦する。すなわち、岡部正綱、曾根昌世（正清）に従って、甲斐国湯野多伊羅の北条軍に対して先陣に進んで戦い首一級を挙げた後、6月には同国三坂の一揆との戦いでも両者の下で先陣をきり、7月には信濃国前山城の伴野刑部の一揆を曾根昌世に従って攻め、軍功があったという。8月、佐久郡の望月一揆に際しても、芦田信蕃に属して首一級を得⁸⁰、9月には岩村田・千賀田森・岩尾の一揆との戦いで曾根方として敵2人を討ち取った。また同年、岩尾千曲川陣の時、真田昌幸・曾根昌世の軍の先陣となったという。こうした軍功により、まず政成の母に甲州竹居村が安堵された後、11月11日に初めて日向傳次郎政成は浜松で家康に謁見して徳川家御家人となり、翌天正11（1583）年閏1月14日、家康から甲斐国南竹居35貫文、村山安林寺分手作文7貫300文、内分300文、同所林教寺分500文、駿河国厚原70貫文の本領を与えられている⁸¹。こうして旧領を回復した政成は、翌年4

月の秀吉と家康の長久手の戦い⁸²の際も松平忠左衛門重勝（額田郡の能見松平家、後に松平忠輝家老）組に属し、先陣に進み首二級を得たという。こうして彼は「大権現御出陣のとき毎度供奉」し、出世していった。

しかし秀吉の領土拡大は急速で、徳川家もこれに従属し、やがて北条家滅亡後に関東に移封される。この頃の政成の状況は不明だが、後述する大久保長安とのつながりがこの頃に形成されたことが推察される。

秀吉死後の覇権をめぐる慶長5（1600）年の関ヶ原合戦の際、政成は軍功を挙げてはいないが、凱旋後の挿話が残されている。西軍に加担して敗走した宇喜多秀家の行方が不明な中で、その家士進藤三左衛門正次が本多正純のもとへきて、秀家自害を言上した。そのとき、秀家の所持していた重宝烏飼国次の腰刀が伊吹山の麓で失われたと聞いた家康は、彦坂元成と日向政成に命じて、進藤とともに伊吹山に行かせ、そこで腰刀を見つけさせ、家康に献上させたという。ただし、これは秀家を逃がすための進藤の策であった⁸³。

この関ヶ原の合戦で全国の所領が大きく変動し、この頃から日向半兵衛政成の活動が目に見えるようになっていく。家康は豊臣家から実権を奪う形で、各地に国奉行を置き、全国支配へ乗り出していく⁸⁴が、半兵衛もその一端を担ったのである。詳細は次号に譲るが、とりあえず残存史料を確認していこう。慶長6（1601）年、日向政成は「家康の財政長官」（所三男による規定）大久保石見守長安のもとで島田直時とともに甲府町奉行を務めた⁸⁵。慶長7～8（1602～03）年には日向政成は島田直時とともに、大久保長安の指示で富士川の通船の検分などに当たっている⁸⁶。さらに慶長8（1603）年、大久保長安署名の通船の認可状では、島田直時・日向政成の両奉行より京の角倉了以へ通船の事情について報告の書状を出したとしている⁸⁷。彼らはこれにより、京都の豪商とも関連をもったとみられる。同年、甲斐は徳川義直の領地となり、武川衆⁸⁸など武田遺臣の多くも後述の通り彼に仕えることになる。同年より江戸幕府は直轄領・旗本領の検地を行っており、三河地方の検地奉行として、米津清右衛門・林伝右衛門・日向政成が任命された。およそ設楽郡・宝飯郡南部を米津が、八名郡・渥美郡の一部を林が、宝飯郡北部を日向が担当し、実際の測量・筆記・検地帳作成は、奉行に属する数名の役人が受け持っていた⁸⁹。慶長9（1604）年5月、米津清右衛門とともに、日向政成は三河国宝飯郡大崎村の検地を行った⁹⁰。また、同郡市田村の検地も日向が行っている⁹¹。米津は大久保長安系の官僚として知られており、政成もその人脈に近いところにいた⁹²。

同年、日向半兵衛は長野内蔵允とともに伊勢国奉行となった。これは伊勢神宮の警備、遷宮の監督⁹³、伊勢国幕領の支配、鳥羽湊の監視⁹⁴などを行う役職であった。もともとその役所は度会郡有滝村（現在の伊勢市）にあったようだが、奉行は外宮近くの山田地内に公事裁許場を設け、有滝役所から出張していたようである。その公事裁許場はいくつかあり、「役所世古ハ慶長八年山田奉行長野内蔵允交替ノ官庁ナリ」、下中之郷の野ノ世古は「慶長九年山田奉行日向半兵衛尉在庁ノ旧地ナリ」と『勢陽五鈴遺響』度会郡卷之四⁹⁵に記載されている。これが曾祢高柳役所、下中之郷役所であるが、その後伊勢国奉行から山田奉行に変わった後、1630年に吹上にも一本

木役所⁹⁶がおかれている。やがて、1635年には有滝から小林に役所機能が移され、結局山田奉行は1868年まで小林役所に拠点を置くこととなる⁹⁷。

慶長14(1609)年正月15日、太刀をさして家康を道で待ち伏せる者がおり、追討すると安西寺に逃げ込んだため、その寺を大勢で包囲するという事件があった。家康の供の中に日向半兵衛がおり、知人の山寺が寺に逃げ込むのを見たため、彼を呼び出して事情を聴くと、彼ら十二人はみな甲州武川の士で、家康4男忠吉遺臣であった。彼らは忠吉老臣の犬山城主小笠原和泉守吉次に所属していたが、忠吉急死後、吉次は彼らの采邑をも自分の所領として言上し、関東への配置換えの際に、彼らを召し連れて行こうとした。彼ら十二人はこれに反発し、自分たちは「もと御家へめし出され、故羽林へ附けられし者なれば、吉次が家僕にあらず」と嘆き、それを直訴しようとしたのだと述べた。日向も同情して人々をなだめ、十二人に食べ物などを与え、その夜旅館で家康に事情を話した。家康は「彼らの罪ではないから吉次を糾明すべきだが、彼らも直訴前に江戸か駿府で老臣奉行に訴えるべきであり、これでは全く農民にひとしいふるまいだ」と不機嫌であったが、「日向がけふの挙動は奇特なりと、稱詞を加へられしとぞ」。この後まもなく、忠吉旧臣は家康9男(初代尾張藩主)義直に付属された⁹⁸。日向はこのように、武田遺臣と徳川家を仲介する役割をたびたびしているようだ。

慶長17(1612)年、「慶長拾七年子五月十一日」付けで、徳川家康は大工頭中井大和守正清に二通の覚書を与えている。一通は禁裏普請(慶長15年6月丈量、16年3月～18年11月工事)に関するもので、禁中御作事奉行として板倉伊賀守(勝重)、日下部兵右衛門(定好)、米津清右衛門(親勝)、山口駿河(直友)、小堀遠江(政一)、村上三右衛門(吉正)、日向半兵衛(政成)、肥田與左衛門(時正)、長野内藏允の名を挙げ、日向より用材(松材木)を求め、これを大坂にて助役の諸大名の奉行が中井の部下の立ち合いの下に受け取るべきこと等を指示している。もう一通は名古屋城普請(慶長15年2月～)に関するもので、「尾州那古屋御城御作事奉行衆」として大久保石見(長安)、小堀遠江、村上三右衛門、長野内藏允、日向半兵衛、原田右衛門、寺西藤左衛門、藤田民部、水谷九左衛門の名を挙げ、上方より下向の職人の作料は上方より支給のことで、石灰は三河より取り寄せたことを、中井に申し送っている⁹⁹。

このように順調に大久保長安の下で出世していた日向半兵衛政成だが、慶長18(1613)年に大事件が起こる。4月25日に大久保長安が没した直後、5月6日に謀反・会計不正があったとされ、取り調べが行われる¹⁰⁰と、島田直時は甲州に派遣されてその事実を調査した。この結果、大久保一族や長安系奉行が処罰されることになる。この際に島田と日向が甲斐国奉行を務めたとする記事もあるが、短期間であったため、国目付的なものではなかったかと白川部達夫は推測している¹⁰¹。しかしいずれにせよこの頃から寛永元(1624)年迄、日向半兵衛と島田清右衛門は奉行として、城番の武川十二騎とともに甲府に勤務した¹⁰²。この甲斐奉行時代、半兵衛の名代として甲府に詰めた人物として、『甲斐國志』は日向五兵衛可加の名を挙げる¹⁰³。

同年12月、政成は鉄砲100挺と足軽五十人を家康から預けられた¹⁰⁴。この状況で、翌年(1614)方広寺鐘銘事件¹⁰⁵をきっかけに大坂冬の陣が起こり、政成は家康に従って従軍する¹⁰⁶が、

その際の挿話がいくつかある。

大坂の陣の際には家康の命令で甲府大泉寺にて「一國一宗の僧侶」を集めて大般若経が転読され、「御札」を日向半兵衛の取次で家康の陣中に送ったといい、勝利の後「萬々歳の後迄正五九月毎年怠慢あるべからずと御直の厳命を蒙り」、御札は今後甲府城へ納付することになったという¹⁰⁷。

慶長19年12月11日、大坂冬の陣の際、家康は石見・但馬銀山の鉦夫を呼び、大坂城櫓石垣等を掘り崩すよう、間宮直元・日向政成・島田直時に命じた。彼らは巡察し、「加賀・井伊・藤堂の陣所より堀鑿つべき地勢あるよし」言上したため、鉦夫数百人がそこから掘り進めたという¹⁰⁸。大阪の三光神社に残る「真田の抜け穴」がそのときの坑道ではないかともいわれるが、定かではない。

こうした坑道掘削と大砲による砲撃で、家康は豊臣方を和議へ促した。この一時的な平和の時期、元和元（1615）年2月に、半兵衛の息子傳右衛門政次が家康に初めて謁見している¹⁰⁹。しかし3月5日、「大坂城中再叛の企あり」との報が届き、堀の埋め立てなどをめぐって講和は決裂し、大坂夏の陣が起こった。家康は4月4日、駿府から大坂に向かったが、その御供の中に、横田甚右衛門尹松らと共に、「先手鐵炮頭坪内玄蕃家定・日向半兵衛政成・齋藤伊豆利宗・共に與力廿騎・同心五十人づゝ」も加わっていた¹¹⁰。

大坂夏の陣で家康が上洛し、「今度の事を京にてはいかが評論するか」と家康が問うた。日向半兵衛正成がそれを受けて、「御譜代重恩の人々」ばかりで「御大勢」の「関東」に対して、「大坂がたは諸浪人共が。城中の金銀の多きをめにかけてあつまりしなれば。竹流しの金多くとり得たらば逃去むのみ。いかで軍のなるべきと。京童までもかく申候」と言上すると、家康の怒りが明らかになったため、政成は恐れてその場から退き、その場の人々も退出した。その後また家康が政成を召し出したので、正成が処分を覚悟して伺候すると、家康は彼をそば近くまで呼び、「お前は軍機に暗いため、ものの言いようを知らない。竹流しのたとえは誰でもわかっているが、このことが城中に伝わり、城兵から人質をとることになったら、城攻めに手間取ることになり良くないので、このようなことをみだりに人にいうな」と上機嫌で言ったという¹¹¹。この大坂夏の陣で家康は豊臣家を滅亡させたが、7月にこの戦役中の伊勢御師による関東調伏が発覚したことは、註で述べたとおりである。

家康没後の元和4（1618）年、政成は与力十騎を預けられ、甲斐の八代巨摩両郡の内において、國分村、末木村、下蘆沢村で合計1000石を与えられた¹¹²。寛永元（1624）年、甲斐は駿河大納言徳川忠長の領分となるが、そのまま彼は忠長付属となる¹¹³。

ところが、忠長は徐々に粗暴のふるまいが多くなり¹¹⁴、寛永9（1632）年父秀忠の死と共に改易となった。政成もそれに連座し、館林藩主松平（榊原）式部大輔忠次に預けられたが、寛永13（1636）年9月18日、政成は許され¹¹⁵、武蔵国榛沢郡沓掛村、岡村、児玉郡下真下村、賀美郡小浜村、四間（軒）在家村、五明村¹¹⁶、上野国邑楽郡、多胡郡多胡村、群馬郡嶋野村で3080石余を与えられた¹¹⁷。

ところでこの間の政成の状況を示す史料が、近年見つかった。『甲陽軍鑑』で名軍師として名をはせた山本勘助＝管助は、長らく実在を疑われていたが、市河文書で実在が確認された後、近年の真下家・山本家文書の発見によりその子孫の実態が明らかとなった。それらの文書によれば、初代山本管助晴幸（道鬼）の後を、実子の二代目管助幸房が継いだ。長篠の合戦で戦死し、その後見人であった初代管助の女婿十左衛門尉幸俊が三代目当主となった。彼は徳川家旗本となったが、息子平一郎幸明の急死により山本家は改易となり、その弟たちは浪人となった。しかしその後、『甲陽軍鑑』の流行により山本家への関心が一部の藩主たちの間で高まり、平一郎の弟三郎右衛門正幸は水戸家への仕官には失敗したものの、1633年淀藩主永井信濃守尚政に仕えることに成功した。こうして彼は山本管助を名乗り、5代目の当主として山本家を再興したわけだが、実はこの仕官の際に彼の身分保障をし、永井家に仲介した人物が、日向盛庵（尚政の女婿日向半兵衛）と甲斐代官平岡和由であった¹¹⁸。盛庵という号は系譜には見えないが、忠長改易後に名乗ったのであろうか。この謹慎の時期にも、彼は武田遺臣の就職の仲介をしていたわけである。

ところで、鄙田青江という刀は備中の青江恒次の作であり、「後の恒次で、名物に入るほどの物にあらず」とされているが、それでも『享保名物帳』に掲載されている。この日本刀を半兵衛が所有していたらしく、元禄期の本阿弥家『名物扣』や寛永～慶応期の同家の『留帳』によれば、寛永17（1640）年に本阿弥家に持ってきて、13枚の折紙を付けてもらったという。これは多分に売るためであったらしく、1647年小倉城主小笠原忠真の娘が福岡城主黒田忠之の世子光之に嫁ぐ際に、引き出物として光之に贈られているという¹¹⁹から、この7年の間に半兵衛から小笠原家にこの刀の所有は移ったということになる。もっとも、享保8年本の享保名物帳には「越中富山から出る 浮田秀家の家来 鄙田半之丞所持」という記述があり、名前からすると会津藩士日向半之丞の可能性もあることに留意したい。

寛永18（1641）年2月、將軍家光は諸大名および旗本諸士にそれぞれ家譜の提出を命じ、奏者番（元若年寄）太田資宗（重正の子で遠山資為の兄、家康側室英勝院の養子）を総裁、林道春（羅山）を主任者として編纂させた。これが『寛永諸家系図伝』として寛永20年9月に完成する。しかしその直前、寛永20（1643）年5月2日、日向半兵衛政成は79歳で亡くなり、谷中の瑞林寺に葬られた。法名は日景であった。

2. 日向半兵衛政成の系譜と所領

日向半兵衛政成の妻は複数伝えられている。一人目は内藤修理亮清成の娘¹²⁰で、後妻が横田十郎兵衛某の娘（甚五郎の妹）¹²¹で、のちに永井尚政の娘¹²²と再婚している。『寛政重修諸家譜』によれば、彼の息子のうち、嫡男半兵衛（傳右衛門）政次、三男惣（半）左衛門正春、五男傳三郎正久は永井氏の子とされており、内藤氏と横田氏には男子が生まれなかったものと見られる。その他の政成の子女として、『寛政重修諸家譜』は、桜田の館において徳川綱重に仕えた次男甚兵衛成澄¹²³、夭折したと思われる四男半右衛門某、長女永井主膳某室、次女菅沼主膳定成室（のち

に日根野豊前守某室), 三女紀伊家家臣日根野九郎三郎勝秀室, 四女神谷八郎左衛門政成室¹²⁴, 五女藤堂平右衛門嘉次室, 六女遠山因幡守資為室を挙げている。以下、『寛政重修諸家譜』における各人の経歴の紹介は最小限にとどめ, 系譜と所領に焦点を当てて紹介したい。

日向半兵衛政成の後を継いだのは, 長男半兵衛(傳右衛門)政次(第二代, 1609~1693)であった。後述する五島家の分知騒動で活躍したのが彼である。彼は八丁堀の屋敷に住み¹²⁵, 死後は池上本門寺に葬られ, そこが「のち代々葬地と」された。このように, 旗本日向家は日蓮宗系の寺院とのつながりが深い。政次の後継者は, 駿河大納言忠長の家老であった鳥居成次の娘を母にもつ, 長男傳右衛門正知(第三代, 1632~1698)である¹²⁶。彼は春宮御所造営奉行を拝命し¹²⁷, 父の死の5年後に亡くなったが, 亡くなる直前の元禄11(1698)年3月7日に, 采地を駿河国富士郡平垣村436石余, 加島(嶋)平垣村142石余, 加島松本村, 入山瀬村, 十兵衛村, 加島十兵衛村, 久沢村823石余, 駿東郡椎路村1095石余の合計3080石余に移されている¹²⁸。彼は叔父正春の娘を妻としており, 二人の間には半兵衛正方, 左京(喜之助)正茂, 高木(成瀬)正良が生まれている(靱負正容の母は某氏)。同年12月18日に正知の後を継ぎ, 第四代当主となったのは半兵衛正方(1667~1705)であったが, 彼は同日に弟左京(喜之助)正茂に1000石を分与し¹²⁹, 2080石余を継承した。彼は跡継ぎに恵まれず, 結局この所領は, 叔父成澄の養子となり1704年に廩米440俵を支給されていた, 異母弟靱負正容(第五代, 1686~1729)が継ぐことになる¹³⁰。ところが, 正容も男子に恵まれず, 第六代当主は甥(左京正茂の子)である正儔(1711~1737)が継ぎ, その後いどこ(成瀬正良の子)正武が第七代当主を継いだ。第八代当主となったのは, 安部氏から娘婿に入った正房(1755~96)で, 彼の代の安永7(1778)年6月21日に駿河国富士郡の所領が三河国加茂郡に移されている。この後, 第六代正儔の姪の子である伝右衛門正道(1775~)¹³¹が第九代当主となり, 成瀬正良のひ孫¹³²を妻としている。『寛政重修諸家譜』の記述はここまでだが, その後正道は加納久周の七男である七郎(半兵衛正襄)を養子に迎え¹³³, 以後正襄—半兵衛—小伝太と続いて明治維新を迎えたとみられる(2084石3升5合, 小川町広小路1153坪余, 深川小名木川通955坪5合6勺)¹³⁴。日向小伝太は明治維新の際, 額田県(三河国加茂郡)八草村409石221¹³⁵, 篠原村(2給)199石319, 山ノ中立村25石571, 千田村71石486, 川端村58石979, 静岡県(駿河国富士郡)中比奈村(玉泉寺領以外)203石935を所領として領有していた¹³⁶。なお, その他の静岡県(駿河国富士郡)の所領——弥生村98石226, 瓜島村上組85石468, 下組85石468, 平垣村577石299(金正寺除地は2石033), 十兵衛村(2給+松林寺除地)の内122石754, 松本村(3給+観音堂除地)の内150石536, 松岡村(4給+7社寺領)の内230石282——は, 同じ『旧高田領取調帳』では日向七郎知行となっており¹³⁷, 七郎と小伝太で所領を折半していた様子がうかがえる。この地域の支配を日向小伝太から委ねられていたのが, 富士市平垣にあった松永家であり, 明治期には静岡県内でも有数の大地主で貴族院議員も輩出した。松永邸内には小塚陣屋がおかれ, 日向家所領の取り締まりの拠点となった¹³⁸。

他方で, 左京正茂(1679~1732)の系統を見ると, まず彼は元禄8(1695)年に廩米300俵

を支給された後、3年後の12月18日に兄半兵衛正方から駿河国富士郡久沢村と駿東郡椎路村の所領計1000石を分与され、「廩米は収めらる」。彼は浜町入堀南側に住んだ後¹³⁹、浅草妙音寺に埋葬されており、そこが「後代々葬地と」された。彼の息子たちの内、左京正章（左京家第二代、1702～1742）が父の後を継ぎ、正壽が半兵衛家を継いだ。正章の後は大久保家出身の次郎八郎正英（第三代、1728～1779）¹⁴⁰が娘婿として継ぎ、その後を長男次郎八郎正肥（第四代、半兵衛家第九代正道の兄、1763～）が継いでいるが、この時期に左京家の所領は大きく変わっている。まず正英の代の安永7（1778）年7月21日に、駿東郡椎路村の所領が相模国大住郡曾屋村、淘綾郡山下村、万田村¹⁴¹に移された後、正肥の代の天明5（1785）年12月10日に駿河国富士郡久沢村の所領が同国内の有渡郡、志太郡に移されたのである。明治維新の際、その子孫とみられる日向健次郎は、小田原県万田村（4給）で82石7252、山下村（3給+八幡社領）で300石4730、神奈川県曾屋村（9給+2寺社領）で73石4410、静岡県（駿河国有渡郡）東新田（2給）で177石550、上川原新田で119石458、静岡県（志太郡）桂島村（2給3寺社領）156石3574、弥左衛門新田持添芝地新田78石821、上青島村持添芝地新田で87石548、宮原村（3寺社領以外）で66石747の所領を有していた¹⁴²。

日向半兵衛政成の三男正春（1622～1691）¹⁴³について、『寛政重修諸家譜』は別家を立て旗本になって以降の事績を掲載している。その際に気になったのは、三代目当主となる実子がいるにもかかわらず、彼が五島列島の藩主五島家から妻と養子を迎えていることであった。この点については『五島編年史』に詳しい記述があり、以下の通りであるという。

日向正春＝内記はどうも若い頃、素行に問題があったらしく、「氣過ナルノ故ヲ以テ勘当シ身延へ遣ハシタリ」と書かれている。それを「半兵衛ト懇意ノ故ヲ以テ」五島盛利が聞きつけ、「日向ノ家老作兵衛ニ談」じて家臣に所望し、寛永19年壬午（1642年）5月に「江戸ニテ日向内記ヲ召抱」へ、「入部ノ道中ニ出合ヒ、直ニ五島ニ携へ、新知四百石ヲ与へ主膳、民部同前ニ遇シ、盛次ノ妹ヲ妻ハス」¹⁴⁴という。この妻が深心院妙典日解大姉（普照院）である。

五島盛利が日向家との関係を強化しようとした背景には、以下のような事情もあった。もともと盛利は五島家傍流の出であり、家臣間に対立があった。1614年頃、盛利が藩士の福江集住政策＝福江直りを始めると、重臣大浜主水は1619年に「藩主盛利ノ失政五ヶ条」を幕府に愁訴し、二年後に大浜が敗訴した後も、藩内ではこの事件が尾を引いていた¹⁴⁵。盛利はこのような藩内事情から、自身の子らの忠実な味方となりそうな人脈を欲していたと見られる。

このような配慮は、盛利・盛次父子の没後に功を奏した。1655年、盛次の嫡子万吉（盛勝）が11歳で父の遺領を継ぐと、部屋住知行500石の叔父民部盛清が後見を命じられた。このとき盛清は、1653年以来兄に要求していたように旗本になることをもくろみ、「横田次郎兵衛、日向半兵衛（盛清ノ姉日向家ニ嫁ス）、大目付猪飼半左衛門等ト別懇アリシヲ以テ、松平伊豆守ニ取りナシ」、人と土地の5分の1を盛清に分知するよう、盛勝家臣へ公儀より言い渡させることに成功する。このため、「不穩ノ状勢」となったが伊豆守らの説得で事なきを得た¹⁴⁶。その後もなかなか分知案はまとまらなかったが、万治4（1661）年4月14日、「奥平美作守宿所ニテ神尾備

前守、横田次郎兵衛、日向半兵衛、猪飼半左衛門寄合ノ上、高割ノ協議アリ」、万吉側家臣、盛清側家臣に誓紙を出させ、27日には「横田次郎兵衛ノ文案ニヨリ」「同日ヨリ割相談始リ、芝ノ御屋敷へ通ヒ数月ヲ要シ」¹⁴⁷、7月10日に「福江方ノ依頼ニヨリ」,「淡路守盛勝ノ舅、奥平美作守方ヨリ横田次郎兵衛、猪飼半左衛門、日向半兵衛ニテ富江分知ノ知行割アリ、五十六ヶ村ノ内、廿ヶ村ヲ分ケ」、10月30日には宗家（福江方＝盛勝方）と分家（富江方＝盛清方）で目録を取り交わした¹⁴⁸。この過程で、日向半兵衛のみならず、日向正春夫妻も尽力したらしく、12月には「隠居普照院（盛次ノ妹ニシテ日向家ニ嫁セル者）へ合力ノタメニ五〇石ヲ給ス」¹⁴⁹と書かれている。

こうして富江陣屋が設置されることになったが、寛文4（1664）年6月17日、「盛清病氣ニ付、上り下り困難ノ故ヲ以テ在江戸ヲ願出デ、コノ年ヨリ江戸住トナ」ったため、「平戸松浦肥前守ノ閑船ヲ借入レ」、この日「御隠居様」とともに出船した。ところが「コノ行ニ、福江方ノ仕立船ニテ、日向惣左衛門、同夫人、亀姫、惣領伝五右衛門、いや様類船ニテ御上リアリ」とある。彼らは7月末に江戸に着いたようだ¹⁵⁰が、この間6月23日には内記＝惣左衛門正春の室、深心院妙典日解大姉が亡くなっており、武蔵池上に葬られた。

この正春夫妻の上京の背景には、盛清による盛勝後見時代に、「時ニ内記旗本タラント、舎兄伝右衛門ニ願出ツルニヨリ、半兵衛トモ内談シタル結果、隠居ヲ願出デ惣左衛門ト改メ」たことがあった。しかし、「公儀ヨリノ仰出ニ、惣左衛門旗本エ願申スハ五島主税（盛勝）ヨリ可願筈、民部、日向半兵衛ヨリ願出ツルハ合点行カズトシテ取上ゲナシ」。これ以前、盛勝にはこの件について知らせがなく、盛勝は不快であったが、盛清の謝罪により盛勝も早速願い出てくれたため、惣左衛門は旗本に列し、小十人組に編入された¹⁵¹という。

このように正春は五島家中を出て旗本になったが、その後天和3（1683）年に再び『五島編年史』に日向氏が登場する。「日向惣八郎、大番組トナル、切米二百俵」。「惣八郎ハ、福江淡路守盛勝ノ第四子、側室、京都ノ人某子ノ出ナリ。諱ハ兄政、後盛栄ト云フ。出デ、日向惣左衛門（半左衛門トモアリ）ノ養子トナリ、八郎右衛門ト称ス」¹⁵²。こうして正春は、亡き妻の兄の孫である八郎右衛門（惣八郎）正竹（～1730）を養子に迎え、第二代当主としたが（1710年廩米350俵、屋敷は赤坂、菩提寺は牛込大信寺）¹⁵³、第三代は正春夫妻の実子正勝（1680～1747）が継いでいる（「葬地正春におなじ」とあり、菩提寺も現在の業平公園付近にあった最教寺に戻ったようだ）。その後は正勝—半左衛門正孝（1729～）—八郎右衛門（半三郎）正直（1750～）¹⁵⁴と親子で継承したが、正直は長尾氏から半三郎正郷¹⁵⁵を養子に迎えている。『寛政重修諸家譜』の記述はここまでだが、この後は半左衛門—大膳—惣八郎という系譜で明治維新に至っており（350俵、赤坂築地252坪余、巢鴨稻荷前（小路）50坪）¹⁵⁶、正直との関係が気になるところである。

最後にもう一つの別家を立てた、半兵衛政成の五男傳三郎（小傳次）正久（～1686）の系統を見たい。彼は慶安3（1650）年9月3日に家綱に仕え、西の丸御小性組の番士となり、廩米300俵を支給されている。彼は本丸勤務を経て貞享3（1686）年10月22日死去し（法名日立）、

小石川の蓮華寺に葬られ、そこが「のち代々葬地と」なった。彼の後、正久—正平（1670～1727）—成常（～1733）と親子で家督を相続した¹⁵⁷が、第四代政勝（1721～1782）は戸田家出身であり、正平の妻や政勝自身の妻と同じく、遠山家に嫁いだ半兵衛政成の娘の血を引いていた（日向政成—遠山資為室—太田資隆—戸田忠勝室—戸田忠次室—日向政勝とつながるが、正平室は太田資隆の姪であり、政勝室は戸田忠勝室の甥の娘である）¹⁵⁸。また政勝は男子に恵まれず、両養子をとって後を継がせるが、この日向清三郎正文（300俵）は岩出氏¹⁵⁹の出身で、戸田忠勝のひ孫に当たる人物である。正文の後、息子金次郎は山高力蔵信敬¹⁶⁰の孫波之助を養子に迎え、明治維新を迎えることになる（300俵、二合半坂下）¹⁶¹。このように、正久系はしばしば日向氏以外から養子をとっているが、女系で血がつながっていることが多い。やはり男系、女系を問わず、何らかの血のつながりは欲しかったということか。

（以下、次号）

註

- 1 私の母方の本家が山梨県にあり、江戸初期からの墓も残っていることから、同姓の武田家臣との関係を中学時代以来推測したことが、旗本日向氏への関心の起源である。とはいえ、現時点ではまだ同家とわが家系とのつながりは見えていない。江戸時代の家紋はわが家系とずれているが、武田家臣時代の家紋や江戸末期の養子の家紋を考えると、あながち無関係とも断言しがたい。
- 2 拙稿「複合国家論の射程：近世北西ドイツ・ニーダーライン地方の事例（1）」（『日本福祉大学経済論集』第57号、2018年9月、83～95頁）。
- 3 法制度の程度によって封建的な人的結合国家と近世の社団国家を分け、後者の動態化として複合国家論を考えるという動きのようであり、そうした新たな段階区分によって、マルクス主義とも共有する「中世—近世—近代」という時期区分を相対化したいつもりらしいが、方向性は未だ見えていない。
- 4 歴史学研究会編『歴史学研究』第989号、2019年10月増刊号の「主権国家」再考Part2——翻訳される主権——（177～203頁）を見る限り、地域差は大きい。
- 5 国奉行については高木昭作「幕藩初期の国奉行制について」（『歴史学研究』第431号、1976年4月、15～29、62頁）；和泉清司「徳川政権成立過程における代官頭の歴史的役割——代官頭発給文書の分析を通して——」（1986年）（藤野保編『論集幕藩体制史 第1期第4巻 天領と支配形態』雄山閣出版、1994年、37～80頁）；村上直『論集代官頭大久保長安の研究』（揺籃社、2013年）などを参照。最近では三鬼清一郎『大御所徳川家康——幕藩体制はいかに確立したか』（中公新書、2019年）も、国奉行としての日向半兵衛について一度言及している。なお、『寛政重修諸家譜』では日向半兵衛政成は慶長七（1602）年、伊勢、近江、甲斐国の郡代を務めたと書かれている。
- 6 柴辻俊六・黒田基樹編『戦国遺文武田氏編』第一巻～第五巻、東京堂出版、2002～2004年；柴辻俊六・黒田基樹・丸島和洋編『戦国遺文武田氏編』第六巻、東京堂出版、2006年。ともに武田家臣の史料までも網羅した重要史料集である。
- 7 黒田日出男『『甲陽軍鑑』をめぐる研究史——『甲陽軍鑑』の史料論（1）——』（『立正大学文学部論叢』第124号、2006年9月、5～74頁）。
- 8 秋山敬「日向大和守の系譜」（『武田氏研究』第25号、2002年、後、一部補訂の上で同『甲斐武田氏と国人——戦国大名成立過程の研究——』高志書院、2003年、220～246頁に収録）。日向大和守は保坂義照『武田二十四将論』のように、年代および力量から見て、武田二十四将に含まるべきだとする論者もいるほどの武将である（土橋治重『甲州武田家臣団』新人物往来社、1984年、100～101

- 頁). 日向虎頭花押は、『山梨県史資料編5 中世2 県外文書別冊写真真集』(山梨県・山梨日日新聞社, 2005年) 275頁に見える。
- 9 須玉町史編さん委員会編『須玉町史』(須玉町, 1998年)。
 - 10 日向図書助一大和守是吉一大和守虎頭(玄徳斎宗栄, 景照院殿)という父子関係が想定されている。この点は秋山氏以前に, 服部治則氏(「武田家家臣の系譜」の研究について)『武田氏研究』第10号, 1993年4月, 62~92頁), 黒田基樹氏が指摘している。服部氏が同論文において, 「『甲陽軍鑑』は軍記物, 物語でありまして, 史書ではございません。しかしまんざら嘘ばかりかいているのではないのでして, 文書類, 一等史料によって確定できるところは用いてよいと考えます。文書の研究から『甲陽軍鑑』の中にも事実が沢山あるということがわかります。しかし, 『甲陽軍鑑』の記事が史料と食い違うことがあった場合には, それは文書の方が正しいので, 『甲陽軍鑑』の方が間違っているとしなければなりません。いつだったか, ある人が手紙をよこしまして, 自分の先祖の事を調べて本にしていたら, 学者の先生に間違いが書いてあるといわれて困っている, というのです。『甲陽軍鑑』によって先祖のことを調べていたらしいのですが, 文書によってそれは誤りだと指摘されたのを, どうも学者というのは非人情だなんて言っておられるのです。それは困るんで, 『甲陽軍鑑』は軍記物の一つで, あくまでも話なんです。話の中には歴史的に実際あったことも書いてあるということです」(64~65頁)と書いているのはまことに適切であり, 黒田日出男論文よりも事実在即している。
 - 11 徳姫書簡については, 小和田哲男『織田家の人びと』第十六回「岡崎殿(徳姫)」(『歴史と旅』昭和62=1987年1月号, 172~177頁)が, 「築山殿すすめにより, 勝頼が家人日向大和守が娘を呼出し, 三郎殿妾とせられ候事」などの信長への徳姫の讒言を引用しつつ, 「一読して明らかなように, 戦国期の文章ではない。誰かが後に創作してここに入れたものであろう」(174頁)と断言している。この記事が, 私が武田家臣日向大和守の名を知った初見である。
 - 12 『甲陽軍鑑』における日向大和守関係の記事14のうち, 創作された合戦の記事と考えられるものは6つであり, その他合戦の年紀の誤りが3つある(秋山前掲書224~225頁)。『新編会津風土記』所収の, 戸石城攻めに関する日向大和守が奉書人となった相木市兵衛への感状も, 偽文書とされる(柴辻俊六『戦国大名領の研究——甲斐武田氏領の展開——』名著出版, 1981年, 437頁)。なお, 近年日向玄東齋と武田信虎の会見の記事も疑わしいとされているが, この点は後に検討する。
 - 13 秋山前掲書244頁註26。
 - 14 同上書242頁。正確には本文に見える通り, 大和守虎頭=玄徳斎宗栄である。
 - 15 斎木一馬・林亮勝・橋本政宣校訂『寛永諸家系図伝』第五(統群書類従完成会, 1982年), 6~7頁。
 - 16 『寛政重修諸家譜』巻第二百二十二(高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編集顧問『新訂寛政重修諸家譜』第四巻, 統群書類従完成会, 1964年, 178~183頁)。玄東齋の記述は178頁に, 半兵衛政成の記述は178~179頁に見える。
 - 17 これも日向図書助の誤記であろう。
 - 18 同上書222頁。この場合, いずれも牛御が玄東齋の祖母と推定される。初代新津右京亮の妻が大和守是吉に再嫁したケースを想定することより蓋然性は高いだろう。『干城録』巻223「日向」の項(堀田正敦・戸田氏栄ら編, 林亮勝・坂本正仁校訂『干城録』第十五, 人間舎, 2003年, 原本天保6(1835)年, 天保8(1837)年補訂, 40~44頁)によれば, 「父玄東齋ハ幼稚にして父にをくれしかハ, 叔父日向大和守昌時に養育せられ, (寛永譜・国朝大業広記)」とあり, 19世紀時点では大和守の甥とされている。
 - 19 平山優「武田信玄家臣団事典」(柴辻俊六編『新編 武田信玄のすべて』新人物往来社, 2008年, 294~341頁)は, 土橋治重『甲州武田家臣団』(新人物往来社, 1984年)と比べるとこの間の研究の進展がわかる貴重な論考だが, ここでも日向宗立は「日向是吉の弟右京亮の子。妻は日向是吉の息女」と断言されている(336頁)。
 - 20 『甲斐國志』巻96(『甲斐叢書』第十二巻, 甲斐叢書刊行会, 1936年, 1312頁)。『甲陽軍鑑』品第三十三——酒井憲二編著『甲陽軍鑑大成』第一巻本文篇上(汲古書院, 1994年)では, 本篇巻十一,

355～356頁に相当する。以後、本書については大成と表記する。なお、大成第五～七巻（汲古書院、1997～98年）は影印篇上～下として、原書の写真を載せている——では、信玄がトイレ＝御閑所を山と呼んだ理由についての有名な議論があるが、「奥衆日向藤九郎」も「道理かな、にほふて、くだるは、しんくさうなり」という説で登場している。また、彼は奥近習の内から選ばれた5人の「よこ奉行」の一人でもあったという（本篇巻十七、大成第二巻本文篇下61頁）。『甲斐國志』は19世紀初頭に成立した甲斐国の地誌であり、当時の甲斐にあった幅広い史料を踏まえて書かれている点で重要な史料だが、これもやはり後代の編纂であることに注意したい。

- 21 『甲陽軍鑑』品第四十三（本篇巻十六、大成第二巻32頁）。
- 22 秋山前掲書235頁。高野山成慶院『武田家日坏帳』による（『甲斐叢書』第八巻、甲斐叢書刊行会、1935年、201頁）。『甲陽軍鑑』品第三十二（本篇巻十一、大成第一巻340頁）、品第四十三に基づいて新田次郎『武田信玄』火の巻（文春文庫、1974年）が描いたような、松山城攻防戦の際ではない。
- 23 秋山前掲書238頁。『甲乱記』（丸島和洋「色川三中旧蔵本『甲乱記』の紹介と史料学的検討」『武田氏研究』第48号、2013年6月14日号、47～79頁、日向大和守父子については66～67、77頁）と光村寺位牌による。平山優『武田氏滅亡』（角川選書、2017年）、106～111、571、594～599、701頁。日向山光村寺は村山北割村にある日向大和守の菩提寺であり、「浄土宗府中瑞泉寺末、寺記云日向大和守入道宗英興立也法諡ヲ景照院殿光岳村公居士ト云天正十年三月二十一日没ス類屬ノ墓石牌子モ存セリ人物部ニ詳ナリ昔ハ真言宗ニテ杉木堂トイフ萬治中當宗ニ改ム」と『甲斐國志』巻之八十三（『甲斐叢書』第十二巻、1058頁）に出ている。なお、同じ村山北ノ割村の日向大和守居址について、『甲斐國志』巻之四十七は「御小路ト云所ニ在リ又比志村耕地ノ内ニ同人ノ陣屋迹ト云處アリ」（『甲斐叢書』第十一巻、1935年、598頁）と述べている。大島城については、湯本軍一・磯貝正義編『日本城郭大系第八巻長野・山梨』（新人物往来社、1980年）、278～280頁、日向氏屋敷については同書341～342頁をも参照。宮坂武男『縄張図・断面図・鳥瞰図で見る甲斐の山城と館 上巻 北部・中部編』（戎光祥出版、2014年）には、現地調査をふまえ、日向大和守屋敷（於小路屋敷）（92～93頁）、要害城（296～297頁）のほか、山高氏屋敷（46～47頁）、横田氏屋敷（308頁）、比志の城山（118頁、口絵）なども掲載されている。古府中の日向大和守屋敷については、市村到『戦国三代の記 真田昌幸と伍した芦田（依田）信蕃とその一族』（悠光堂、2016年、192頁）を参照。
- 24 秋山前掲書224、241頁。比志神社本殿造営棟札については、『戦国遺文武田氏編』第一巻33頁を参照。また、「比志神社大永中ノ棟札ニ日向氏被官三井宮内右衛門ト云者見エタリ」という指摘が『甲斐國志』巻之百十二、上手村の三井市兵衛の項にある（『甲斐叢書』第十二巻、1571頁）。
- 25 秋山前掲書240頁。『甲斐國志』巻之九十六の一説による。
- 26 同上書239頁。中村孝也『徳川家康文書の研究』上巻、日本学術振興会、1958年、367、369頁。
- 27 『甲斐國志』巻之百十二（『甲斐叢書』第十二巻、1564頁）。
- 28 『士林派涸』津金氏（姓清和源氏、義光支流）の胤久の項に、「慶長八年卯、命附于敬公、以旧領讓其嫡子、別賜二千石。十九年冬大坂之役為大番頭出陣、于時六十八歳。翌年夏陣以老衰、其子庄七代之出陣。元和八年戌八月十八日卒、尾州葬于含笑寺、法名信翁全忠」（返り点などは除いた）とあり、その子として、子孫が旗本になった助之進某、大番頭になったが嗣子がなくその母に三百石が与えられた庄七（三郎左衛門）某、その後の尾張藩土津金家を継いだ治部右衛門某、下条庄右衛門妻（後に木村吉右衛門に嫁す）の名が挙がっている（名古屋市教育委員会編『校訂復刻名古屋叢書続編第17巻 士林派涸(1)』愛知県郷土資料刊行会、再版1983年、145～150頁）が、日向氏との関係はわからない。ただし、『士林派涸』三枝氏（姓三枝）の系譜では、日向大和昌時の女子として、津金三郎左衛門妻が挙げられている（名古屋市教育委員会編『校訂復刻名古屋叢書続編第19巻 士林派涸(3)』愛知県郷土資料刊行会、再版1984年、401頁）。
- 29 『甲斐國志』巻之九十六（『甲斐叢書』第十二巻、1312頁）。
- 30 『甲斐國志』巻之八十三（『甲斐叢書』第十二巻、1062頁）。山梨教育会北巨摩支会編『北巨摩郡誌』（名著出版、1976年）、165頁には、「天正中日向大和寺朝臣兼繁卿開基」とあるが、誤りか。なお、

後述する『火映』第20号によれば、18世紀の三條日向家史料に日向善之丞の子孫の「甲州逸見比志村 日向善三」が登場し、「白龍山徳泉院日向善之丞開基」との記述がみられるという。このほか、三條日向家史料には、日向藤九郎が藤原氏から源氏に改姓したとか、「甲州村山北ノ割、光村寺辺ニ中島太兵衛と申者日向氏家来筋之御尋」などの興味深い説が出ているが、18世紀時点で既に真偽不明になっている。

- 31 もっとも、小説などでの家康の嘆きに反して、この時期信康を中心とする岡崎衆と、家康を中心とする浜松衆との間で対立があり、信康の男である信長の了承を得て、後者が前者を肅清したという見方もある。平山優『武田氏滅亡』314～329頁もほぼ同意見である。
- 32 この事件は江戸幕府初代將軍の長男にかかわる事件であるだけに、司馬遼太郎『霸王の家』上巻（新潮文庫、2002年）など、多くの小説において扱われてきた。この娘の名は史料には見えないが、山岡莊八『徳川家康』第5巻（講談社文庫、1974年）では日向大和守昌時の妾腹の娘で、医師減敬の養女あやめとして登場する（横山光輝による漫画版では、『徳川家康』第3巻、講談社漫画文庫、1997年）。新田次郎『武田勝頼』（三）空の巻（講談社文庫、1983年）では、大和守では矛盾があると考えたのか、駿河に来た武田信虎家臣日向昌時の娘八重が、そしてまもなくその従妹おつぎも、医師茗瓊の紹介で信康側室となり、築山御殿に住んでいる（36、46頁）。本書では、信康事件の本質を酒井忠次と信康との確執に見ている。井上靖『信康自刃』（同『天目山の雲』角川文庫、1975年）では、信康側室は日向守昌行の妾腹の子となっている（75頁）。小池一夫原作、小島剛夕作画の漫画『半蔵の門』そ（18）の巻（スタジオ・シップ）では、彼女は日向紅野の名で登場する。その他、日向氏とは明示しないが、信康側室のお糸（火坂雅志『天下家康伝』下巻、文春文庫、2018年、原本2015年、10頁以降）、雪乃（かやまゆみ『時をかけた少女たち 天下統一編』講談社漫画文庫、2005年）なども、この女性を指すだろう。
- 33 桑田忠親監修、宇田川武久校注『改正三河後風土記』（中）（秋田書店、1976年）、114～121頁（第十六巻）。同書は平岩親吉撰とされる『三河後風土記』を奥儒者成島司直が「正史に準拠して誤謬を削除し」1833年に改撰したものである（（上）1～4頁）。
- 34 小和田哲男前掲記事参照。
- 35 もっとも、実際の日向大和守虎頭は大きな武功をあげているように見えず、むしろ第三次川中島合戦の際の事前の鬼無里方面の調査（柴辻俊六・黒田基樹編『戦国遺文武田氏編』第一巻、東京堂出版、2002年巻頭、201頁；鴨川達夫『武田信玄と勝頼 文書にみる戦国大名の実像』岩波新書、2007年、119～121頁）や、上杉輝虎の上野出兵に備えた防備のための一徳齋（真田幸綱）との調整（黒田基樹・平山優・丸島和洋・山中さゆり・米澤愛編『戦国遺文真田氏編』第一巻、東京堂出版、2018年、17頁；柴辻俊六・黒田基樹編『戦国遺文武田氏編』第二巻、東京堂出版、2002年、44頁）のような、地味な活動の方が多かった可能性がある。甲府に近く、かつ信濃と甲斐を媒介する道筋（秋山前掲書の「武川衆と新府城」、2001年補訂、279～294頁）の土豪として、穴山氏のように、「主に敵の押さえのため組織された有力な武田軍別動隊の中心であったため、決戦場での活躍が伝えられなかったのかもしれない」（平山優『穴山武田氏（中世武士選書5）』戎光祥出版、2011年、114頁）。この場合、実際の戦闘よりも玄東齋のような諜報が重要になり、むしろ2人は連携していた可能性も高いように思われる。
- 36 『徳川林政史研究所蔵 藩士名寄』35さ上、112～114頁（蓬左文庫所蔵）。前掲『士林浜回』三枝氏（姓三枝）系譜（校訂複製版401～403頁）の「信喜」（新蔵左衛門・山城）の項に「実姓三枝。藤九郎戦死後、逍遙軒命為大和養子、改日向。甲州滅後剃髮号養寿軒。元和八年戌十一月卒」（401頁）とあり、こちらでは逍遙軒は養子縁組を命じただけだと書かれている。
- 37 『士林浜回』巻七十八の三枝氏系譜の「信正」（大蔵・新左衛門・後改三枝新八）の項に、慶長十（1605）年五月十五日付けの日向大蔵宛て家康朱印状が掲載されている（401～402頁）が、日向大和守との関係がこの朱印状そのものから分かるものでもない。山梨県編『山梨県史資料編8 近世1 領主』（山梨県・山梨日日新聞社、1998年）、186～187頁、449号文書や徳川義宣『新修徳川家康文

書の研究』(徳川黎明會, 1983年), 518頁にも, 同史料は掲載されている。

- 38 蓬左文庫の名古屋城下デジタル復元マップで検索すると1824, 1847, 1870年の邸宅所在地がわかる。
- 39 『唾者の独見』(文政末～天保初め頃か)の「日向次房」の項(菊池重匡編『続会津資料叢書(上)』歴史図書社, 1974年, 原本1927年, 42～51頁)。車家をめぐる不祥事については、『家世実紀』巻之四, 十七(豊田武編『会津藩家世実紀』第一巻, 吉川弘文館, 1975年, 124頁以降, 573頁), 巻之五十九(家世実紀刊本編纂委員会編『会津藩家世実紀』第三巻, 吉川弘文館, 1977年, 587～590, 608～621頁)参照。
- 40 芳賀幸雄編著『要略会津藩諸士系譜 下巻』歴史春秋社, 2001年, 原本1833年。なお, この系譜では, 具平親王……日向大和守昌衡—真篠遠江守某—日向出雲守次房となっている。
- 41 星亮一『会津落城 戊辰戦争最大の悲劇』(中公新書, 2003年), 43, 52, 59, 111～116頁。122～123頁には会津城下の地図もあり, 日向家の場所がわかる。本書は会津の敗北の原因を, 薩長側の強引さ, 武器の優位と戦略のみならず, 奥羽越列藩同盟側の連携不足, 人選の誤り, 情報伝達の遅れ, 会津農民の離反にも求めている。なお, 佐々木克『戊辰戦争 敗者の明治維新』(中公新書, 1977年)以来, 列藩同盟側にも独自の政権構想があったことは再評価されている。佐々木も137頁で日向茂太郎, 155頁で白虎二番士中隊隊長「日向外記」について触れている。菊地明編『会津藩戊辰戦争日誌・上』(新人物往来社, 2001年)等も参照。中村彰彦『白虎隊 増補決定版』(PHP文庫, 2016年, 旧版2001年)は, 白虎隊を自刃十九士を含む士中二番隊に限らず全体的にとらえようと, とりわけ山川健次郎, 飯沼貞吉, 酒井峰治の証言をもとに, 状況を具体的に再現しようと試みている。ここでは士中二番隊中隊頭日向内記を, 会津藩の地下工作を担った重要人物とする近年の研究(富田国衛『会津戊辰戦争 戸ノ口原の戦い 日向内記と白虎隊の真相』おもほん社, 2010年)も紹介されている。
- 42 日向ユキ「萬年青」(宮崎十三八編『会津戊辰戦争史料集』新人物往来社, 1991年, 221～238頁)。なお, 彼女の父方のお婆は, 野口成義に嫁いで富蔵を生んだ。富蔵は後に英国外交官アーネスト・サトウの秘書となる。もう一人のお婆フジは柴佐多蔵と結婚し, 軍事奉行添役太一郎秀治, 志計留(謙介), 五三郎, 四郎=東海散士, 後の陸軍大将五郎らを生んだが, 8月23日に太一郎の妻とく, 娘土屋そい(そゑ, 夫土屋敬治は戦死), さつと共に自刃した。ふじの娘木村かよも負傷した夫を含め一家9名揃って自刃している。柴五郎はこの後, 薩摩への恨みをばねに, 苦境の中を生き抜くのである。なお, 太一郎は母方親族日向新六の妹すみ子と戊辰戦後に野辺地で再婚した(石光真人編著『ある明治人の記録 会津人柴五郎の遺書 改版』(中公新書, 1971年, 2017年改版)。この点, 日向ユキが薩摩藩士内藤兼備と結婚したことは, 注目される。
- 会津藩は維新後, 斗南藩として再興を許されたが, それは実際には挙藩流罪というに等しく, 藩士たちは窮乏生活を余儀なくされた。その挙句, わずか一年半で廃藩置県となり, 斗南藩は消滅した。日向ユキや柴五郎の回想録にはその苦難が具体的に述べられているが, 星亮一『斗南藩——「朝敵」会津藩士たちの苦難と再起』(中公新書, 2018年)にそれらがまとめられている。
- 43 荘田三平「戊辰の役会津殉節婦人の事績」(1917)(前掲『会津戊辰戦争史料集』259～274頁)。日向衛士の妻も, 二つになる子を刺し, 七つになる上の子も刺そうとして, 周囲に押さえられている(星亮一『白虎隊と会津武士道』平凡社新書, 2002年, 87頁)。
- 44 小池進『保科正之』(吉川弘文館人物叢書, 2017年)は『家世実紀』を引用し, 寛永13(1636)年の保科正之の山形20万石拝領に伴う同15(1638)年4月から翌年にかけての領内検地の後, 日向兵左衛門ら郡奉行3人が連署して, 定納一紙を一斉交付したこと(1639年3月10日付け), 同20(1643)年7月4日の正之の会津藩23万石への転封の際, 日向次吉らが山形城を引き渡したこと(8月8日)などを記載している。兵左衛門も次吉も次房の子である。
- 45 日向(酒井)力「三條日向家の伝承」(『佐久文学火映』第12号(2012年4月)から連載中)。ただし, 日向力氏によれば, 記事の一部に誤りがあるとのことである。三條日向家は佐久市の青沼駅周辺の日向氏で, 力氏はその子孫にあたる。日向力氏は日向氏研究会なる親睦会を主催されているようである

- が、残念ながら私は未参加である。彼はこれまでの研究を本にまとめようとしている。本来、彼の持つ史料を実見すべきであるが、新型コロナウイルスによる外出制限のため、私は未見である。貴重なご論考をまとめてお送りくださった氏に感謝の意を表したい。
- 46 『甲斐國志』巻之百十二（『甲斐叢書』第十二巻、1566頁）。なお、同頁には日向氏ノ封邑村山北割村の坂本清三郎の項があり、[寛永十五年] 戊寅極月十八日の日向某（昌元？昌光？昌允？花押）ノ書なるものの存在が記載されているが、前掲湯本軍一・磯貝正義編『日本城郭大系第八巻長野・山梨』（新人物往来社、1980年）、342頁によれば、この地区はほとんどが坂本姓で、血族的土地分割の痕跡が見られるという。
- 47 山梨県立博物館監修、海老沼真治編『「山本管助」の実像を探る』（戎光祥出版、2013年）。武田信玄は東照大権現徳川家康を破った武将として、江戸時代の軍学では重視され、『甲陽軍鑑』のような軍記物は祖先の功績を示すものとして、遺臣同士のネットワークとともに、武田遺臣の就職に役立った。日向清庵（半兵衛政成）自身も、山本管助の子孫の就職の斡旋をしている。
- 48 『甲陽軍鑑』品第四十三（本篇巻十六、大成第二巻 37～38頁）。
- 49 『甲斐國志』巻之九十六（『甲斐叢書』十二、1313頁）。「慶長十三年五月十四日、八十七歳にて死去。法名宗立」（『寛永諸家系図伝』）。ただし、玄東齋の没年には87歳説と84歳説があり、法名を宗臘と記したものもある。埋葬地は京師妙傳寺である。
- 50 同上。
- 51 越後上杉氏の家臣に新津氏がいるが、越後の土豪であり、またその一族がわざわざ村山の土豪日向氏を頼っていく必要性もわからない。なお、玄東齋系日向氏は『寛永諸家系図伝』等では清和源氏義光流小笠原流とされているが、新津右京亮某以前の系譜がわからない以上、それが自称にすぎないのは明白である（ただし、その「系譜意識」が縁組などの際にどのように機能したのかには、検討の余地がある）。また、「新津の家紋本来松皮菱たりといへども、信玄より割菱鷹羽を給はりて、あらためて紋とす」（『寛永諸家系図伝』）、「今の呈譜に、はじめ新津を稱せしとき、松皮菱を用ふ。玄東齋がときより日向家の紋、違鷹羽にあらたむ。割菱は武田信玄あたふところなりといふ」（『寛政重修諸家譜』巻第二百二十二、新訂第四巻 180～181頁）とあり、新津氏時代と日向氏時代で家紋が変化している。
- 52 『寛永諸家系図伝』では玄東齋の祖父新津右京亮某の項に「生國信州佐久郡」と書かれており、玄東齋某の項にも「生國同前」とある。『甲斐國志』の記述を受けて、太田亮『姓氏家系大辞典』第三巻（角川書店、1963年）の「日向（ヒウガ、ヒナタ、ヒムカ）」の「11 信濃の日向氏」の箇所には、「信濃佐久郡日向邑より起る」と書かれており、日向大和守昌時、玄東齋の名が挙がっている（ただし、秋山論文以降、大和守系は甲斐村山郷出身とみられている）。その他、12は半兵衛正之（正成）の子孫、15は会津の日向氏、10は越後の日向氏で、16の雑載には五島藩重臣日向氏、山田奉行日向半兵衛正成、伊勢小林布政司日向半兵衛の名が挙がっている（4940～4941頁）。奥富敬之『日本家系・系図大事典』（東京堂出版、2008年、850～851頁）では、日向大和守家を信濃国佐久郡日向小泉村（上田市小泉）発祥としているが、玄東齋系との混同であろうか。なお、『甲陽軍鑑』本篇第十五（大成第一巻 504頁）によれば、小幡上総守の「かんにん分」所領は信州日向にあったとされており、甲陽軍鑑の作者と日向氏との関係を考える上で、気になるところである。
- 53 ただし玄東齋成人後とみられる1541年7月に、上杉憲政軍三千騎が海野に出兵した事件はある（武田氏研究会編『武田氏年表 信虎・信玄・勝頼』高志書院、2010年、67頁）。玄東齋の生年は没年からの逆算によっているが、或いは生年を再検討した方がいいのかもしれない。
- 54 『甲陽軍鑑』品第三十三（本篇巻十一、大成第一巻 346頁）。
- 55 甲斐国追放後の信虎については、平山優『武田信虎——覆される「悪逆無道」説（中世武士選書 42）』（戎光祥出版、2019年）、丸島和洋「甲斐国追放後の武田信虎・信友関連古記録補遺」（『武田氏研究』第59号、2019年1月、38～42頁）などを参照。平山によれば、下俣村にあった円福寺は焼失・移転により南西村の法輪山円満寺になったという（378頁）。もっとも、この信虎と玄東齋の対話内容を、

『甲陽軍鑑』の作者がどのような経路で知ったのかについては、玄東齋の生国に関する発言内容とともに、疑問が残る。

- 56 ただし高野山成慶院（現櫻池院）に伝わる甲州月牌帳（過去帳）に、永禄六年癸亥（1563）九月五日の「玄東宗隴首座 逆修」の記録がある（山梨県立博物館編『開館10周年記念特別展 武田二十四将——信玄を支えた家臣たちの姿——』山梨県立博物館・少國民社，平成28＝2016年，28頁，史料36）。
- 57 丸島和洋『戦国大名の「外交」』（講談社メチエ，2013年），138頁以降。
- 58 ただし、『甲陽軍鑑』にこう書いてあっても、同時代史料では確認できないという。『甲陽軍鑑』本篇卷八（大成第一卷183頁），本篇卷十一（同360～361頁），末書下巻下（大成第二卷482～483頁）参照。
- 59 『甲陽軍鑑』本篇卷十一（大成第一卷360頁）。その末書上巻（大成第二卷275頁）には、「関東房州おきの嶋，是八日向源藤斎（18ウ）御使に参候時，ゑつ持きたる」とあり，諸国御使者衆は諜報組織として，使者に行った帰りに当該地域の絵図を持ち帰ることもあったようである。また，丸島前掲書は，武田氏外交の取次が，特定の一門・宿老一当主側近一境目（国境地帯）の城代を通じて行われていたことを明らかにした。玄東齋関係のみ述べれば，越前朝倉・近江浅井氏との取次は穴山信君が，摂津本願寺との取次は穴山信君一板坂法印・森本蒲庵・長坂光堅（釣閑）が，安房・上総里見氏との取次は小山田信茂一土屋昌統・昌恒が，下野宇都宮氏との取次は武田信豊一土屋昌統一真田昌幸が行っていたという（丸島前掲書，104～106頁）。だとすれば，玄東齋はこれらの人々との交流が深かったことが推測され，事実土屋氏との関係は史料的に裏付けられる。
- 60 柴辻俊六・黒田基樹編『戦国遺文武田氏編』第二卷，東京堂出版，2002年，230頁，1299文書。
- 61 黒田基樹・佐藤博信・滝川恒昭・盛本昌広編『戦国遺文房総編』第二卷，東京堂出版，2011年，261頁，1343号文書；柴辻俊六・黒田基樹・丸島和洋編『戦国遺文武田氏編』第六卷，東京堂出版，2006年，176頁，4219号文書。
- 62 『戦国遺文房総編』第二卷，294頁，1430号文書；『戦国遺文武田氏編』第三卷，東京堂出版，2003年，147頁，1877号文書。前日の5月13日付けて小泉久遠寺宛てに，武田信玄の寺中安堵の判物が出されている（『戦国遺文武田氏編』第三卷，146頁，1873号文書）。
- 63 『戦国遺文房総編』第二卷，295頁，1432号文書；『戦国遺文武田氏編』第六卷，108頁，4051号文書。千葉県にある保田妙本寺は日蓮正宗（富士門流）八本山の一つであった。
- 64 水藤真による現代語訳によれば，「十月三日，甲府を出て，十日遠江に乱入した。敵領は残さず撃破し，二俣という地を取り詰めた。既に三河の山家，美濃の岩村が味方となり，信長方に対し軍事行動を開始した。詳しいことは玄東齋（日向宗立）を遣わして口上し，今後の軍事行動についても相談したい」（『古今消息集』）という内容の書状を持って行った。信玄晩年の西上作戦中のこの時期，7月～10月16日には織田信長・信忠父子は虎御前山に陣取り小谷城の浅井氏と対峙しており，朝倉義景も7月末～12月3日には大嶽山に援軍を率いて来ていた。信長が帰った後も，木下秀吉・磯野丹波らは残って小谷城・大嶽山と対峙している。玄東齋のこの使いは，戦争中に敵地を往来する危険な仕事であった。なお，軍記物であるが，このころに玄東齋が小谷城を訪れたという記録（富野治右衛門（木村重治復刻）『復刻 浅井三代記』おぎした印刷，2010年，底本1689年，384頁）もあり，妥当であろう。しかし，12月3日，朝倉義景は戦果なき長期滞陣に疲れて，信玄とともに信長を挟撃する絶好の機会に軍を引いてしまい，「御手の衆，過半帰国の由，驚き入り候。おのおの兵を労ることは勿論に候。しかりといえども，此節，信長滅亡の時刻到来候のところ，ただ今寛宥の御備，労して功無く候か。御分別過ぐべからず候」と信玄は激怒した。本願寺光佐（顕如）も義景が本当に出馬するか確認するよう使者に命じている。この時期，朝倉家では謀反人と混同して家臣の領土を没収したり，家臣同士で領地を侵して出陣の支度に支障をきたしたりと，末期状況を呈していた（水藤真『朝倉義景』吉川弘文館人物叢書，1981年，新装版1986年，109～115頁）。

なお，武田信玄は11月19日付けて遠藤加賀守胤勝にも書状を出して，「又越前陣へ，越使者候。

- 路次無相違様、指南可為祝着候」(返り点は省略)と述べており、この使者が日向玄東齋と見られる(黒田惟信編『東淺井郡志 第二卷』名著出版、1971年覆刻、原本1927年、496～497頁)。遠藤は美濃郡上白鳥宿におり、加越・長島の門徒経由で本願寺と連絡をとっていた信玄が、やはり門徒経由で朝倉、次いで浅井氏と交流を持った際、郡上白鳥一油坂峠一越前大野郡というルートで朝倉氏と連絡をとり、遠藤氏に接近したものと見られる(同上書、488～489、492頁)。信玄書状は、前掲の徳川義宣『新修徳川家康文書の研究』50頁にも掲載されている。
- 65 信玄による厚原の所領安堵状については、『戦国遺文武田氏編』第三卷、188頁、1993号文書を参照。厚原には現在も二本樋と呼ばれる、伝法・厚原の二方面に給水する用水があり(植松家が作り管理していた)、家康がその管理の在り方について地元へ介入した記録がある(次号)。厚原は日蓮の「熱原の法難」で知られる土地であり、旗本日向家の菩提寺がほぼ日蓮宗系であることを踏まえると、何かしら関連があるのかもしれない。
- 66 丸島前掲書145頁。
- 67 『群馬県史』資料編7、2804号文書；『戦国遺文武田氏編』第三卷、325頁、2395号文書。日向大和守虎頭を檀那とする安養寺棟札(同上書324頁、2394号文書)とほぼ同時期の文書である。
- 68 『山梨県史資料編4中世1』23号文書；『戦国遺文武田氏編』第四卷、東京堂出版、2003年、65頁、2604号文書(3月4日付け一蓮寺寺領面付)；同上書65～66頁、2606号文書(3月6日付け知行地面付、宛名無し)。
- 69 佐藤八郎「駿州大宮神馬奉納記について」(『武田氏研究』第9巻、1992年、9～22頁)。
- 70 秋山前掲論文、241頁。
- 71 『甲斐叢書』第六卷(1933年)36頁。この記事のゆえか、『干城録』巻223「日向」の項(前掲40頁)では、「武田家没落の後ハ甲斐国積翠寺に寓居し、(国朝大業広記)」とある。湯本軍一・磯貝正義編『日本城郭大系第八巻長野・山梨』(新人物往来社、1980年)、要害城の項(397～400頁)、398頁でも『裏見寒話』を引用している。平山優『天正壬午の乱 増補改訂版』(戎光祥出版、2015年)では玄東齋の動向には触れていない。
- 72 この点で興味深いのは、『甲陽軍鑑』における日向氏関係の記述の提供元である。日向氏に関しては、信虎期～信玄初期にかけての大和守の活躍と、玄東齋など一族関連の記述が少々あるくらいであり、『甲陽軍鑑』の著者はそれほど日向氏との交流があったわけでもなさそうである。にもかかわらず、駿河の武田信虎と会った際の玄東齋の発言などを、同書が記述しているのはどのような情報元によるのか。可能性としては、たぶん日向半兵衛政成によるものと思われるが、或いは、近年の説のように、この記述も捏造なのか。
- 73 『甲斐國志』巻之九十六(甲斐叢書十二、1313頁)。
- 74 『寛永諸家系図伝』には登場しない。
- 75 政成の母への竹居村の所領安堵については、既に『寛永諸家系図伝』で言及されている。
- 76 以下の日向半兵衛政成(政之)の生涯の概略については、前掲『寛永諸家系図伝』、『寛政重修諸家譜』、『干城録』を参照。それらは『寛永諸家系図伝』をもとにしているため、記述がだいたい重複している。なお、彼の花押は山梨県編『山梨県史資料編8 近世一 領主』山梨県・山梨日日新聞社、1998年)、189～193頁で見られる。
- 77 『甲陽軍鑑』品第十七(本篇巻八、大成第一巻180頁)。巻十五(同511頁)には、友野又一郎との「せぬあふぎ切に伝次ハかちたる事」が記されており、気の利いた小姓として信勝に愛されていたことがうかがえる。
- 78 『甲斐叢書』第十二巻、1313頁。
- 79 もっとも、柴辻俊六・黒田基樹編『戦国遺文武田氏編』第五巻(東京堂出版、2004年)の戸倉城関連史料を見ても、個別の事件であるためか、この件は出てこない。
- 80 「按するに貞享重田平助書上に、信濃国佐久郡一揆の時、芦田右衛門佐御方となり(信濃)三沢の山小屋に籠る。此とき加勢として柴田七九郎(康忠)及び政成を遣はさんと記し、また国朝大業広記天

- 正十年九月廿五日の条に、(信濃) 芦田小屋寄手の加勢彼地にいたりしより、日ことの合戦に各軍功を励ます。ことに横田甚五郎(尹松)ハ敵を討、妹婿の日向伝次郎に首をとらずと見ゆれとも、疑ハしけれハとらず」と『干城録』(前掲書、41頁)に記載されている。芦田(依田)信蕃の三澤小屋籠城戦については、前掲市村到『戦国三代の記』195～236頁を参照。前掲平山優『天正壬午の乱』によれば、天正壬午の乱での家康の勝因は、こうした武田遺臣の土地勘によるところが大きいようだ。
- 81 前掲中村孝也『徳川家康文書の研究』上巻、474頁。
- 82 長久手の戦いで池田勝入恒興の首級を挙げたのが永井伝八郎直勝であり、直清・尚政の父である。長久手古戦場駅前の古戦場公園には、庄九郎(池田元助)塚と共に、勝入塚(勝入池田公戦死處)が立っている。
- 83 板坂卜斎覚書・浮田秀家記に基づき、『干城録』(前掲41～42頁)に掲載されている。板坂卜斎「慶長記 中」(小野信二校注『戦国資料叢書6 家康史料集』人物往来社、1965年)、486～487頁が元ネタであろう。
- 84 曾根勇二『大坂の陣と豊臣秀頼(敗者の日本史13)』(吉川弘文館、2013年)。
- 85 村上直「武田家臣団の解体と蔵前衆」下(『日本歴史』168号、1960年)。白川部達夫「大坂町奉行の成立についての二・三の問題」(『日本歴史』第481号、1988年6月号、47～62頁)、51頁。島田直時は、代々の三河譜代で徳川家康の有力な民政官であった島田重次の三男であり、元和5(1619)年には久員正俊とともに初代大坂町奉行を務めた。
- 86 白川部同上論文、51頁。
- 87 齋藤俊六・荻野三七彦編『新編甲州古文書』第三巻(角川書店、1966～69年)、2377号文書。白川部同上論文、51頁。
- 88 武川衆については、秋山前掲書の「武川衆の武川筋支配」(1999年)、247～278頁を参照。武川十二騎と津金衆が1607～1616年には甲府城番を務めており、その中には山高氏の名も見える。
- 89 新城市誌編集委員会編『新城市誌』新城市、1963年、143頁。
- 90 明治2(1869)年に提出された大崎村の村鑑帳の冒頭に、「慶長九年辰五月 日向半兵衛米津清右衛門検地」とある(近藤恒次編『三河国宝飯郡村差出明細帳』国書刊行会、1986年、原著1957年、178～180頁)。
- 91 正徳3(1713)年に提出された「市田村差出帳」下書写にも、名主喜太夫が持つ「御水帳六冊」の一冊として、「百拾年以前慶長九辰年、日向半兵衛様御検地御本帳老冊」とある(同上書、180～188頁)。新編豊川市史編集委員会編『新編豊川市史 第六巻資料編 近世上』(豊川市・クイックス、2003年)、132～134、139頁は竿取役人名まで挙げている。
- 92 曾根勇二「慶長期の幕領支配について——近江・三河・信濃を中心とした幕領研究の基礎的作業——」(『東洋大学文学部紀要 史学科篇』第15号、1989年、27～67頁)、とくに29～30、33、41頁。山本英二「幕藩初期三河国支配の地質的特質」(1989年)(前掲『論集幕藩体制史 第1期第4巻 天領と支配形態』157～193頁)。
- 93 中井信彦・高橋正彦「史料紹介大工頭中井家文書(六) [一三九]「国々諸事触下覚写」『史学』(三田史學會)第40巻第1号、1967年、141～156頁、とくに152頁。慶長14(1609)年の第42回遷宮の造営奉行は長野と日向であり、当時の伊勢神宮祭主は岩出種忠、大宮司は河辺常長、内宮長官は藪田守基、外宮長官は楡垣貞副であった(『三重県史資料編近世二』付表(12)～(13)頁)。また、慶長十(1605)年十二月二十二日付け長野友秀・日向一成連署裁許状が、輯古帖第三冊105号文書として残っている。また「駿河土産」によれば、元和元(1615)年七月、豊臣家御用達の伊勢御師戸部大夫が、大坂の陣の際に秀頼の内意をうけて家康父子を呪詛したとの噂がたち、「伊勢の事奉る日向半兵衛正成。中[長カ]野内藏允」が尋問し確認したため、罪案を決して駿府に知らせたところ、家康は「そは奉行人の心得違なり」とし、それは御師にはふさわしい仕事なのだから、早く獄から出し、没収した器材もすべて返却せよと命じたという(「東照宮御實紀附録卷十六」、黒板勝美編『新訂増補國史大系 第三十八巻 徳川實紀 第一篇』吉川弘文館、1929年、1998年新装版、279頁；「台徳院

- 殿御實紀卷卅九』『新訂増補國史大系 第三十九卷 徳川實紀 第二篇』66頁).
- 94 三重県編『三重県史資料編 中世2別冊 伊勢神宮所蔵文書補遺』(ぎょうせい, 2005年), 176～177頁に, 十一月八日付け角屋七郎左衛門宛ての日向半兵衛書状が掲載されている.
- 95 安岡親毅(倉田正邦校訂)『三重県郷土資料叢書第85集 勢陽五鈴遺響5 度会郡』(1978年, 1647年作か), 68, 65頁. 世古とは伊勢の方言で路地のことを指す. 御屋敷世古は高柳商店街の付近に, 野ノ世古は市立図書館向かいの等観禪寺の辺りにあった. 『柳營補任』巻之二十「伊勢山田奉行」の項に, 「慶長八卯年任 元和三巳年迄 長野内藏允友秀」, 「慶長八卯年任 同十三申年迄 日向半兵衛正成」とある(東京大學史料編纂所編『大日本近世史料 柳營補任五』東京大學出版會, 1965年, 1983年覆刻, 134頁). 日向の下代(留守居)は山崎十右衛門政豊であった(御園村誌編纂室編『御園村誌』第一法規出版, 1989年, 196頁).
- 96 現在吹上二丁目お屋敷にあるスーパーの前に「山田奉行所跡」の石柱(昭和8=1933年)と案内板があるが, 1986年に現在地に移転した由.
- 97 小林役所は現在, 部分的に残され, 伊勢山田奉行記念館となっている. 山田奉行については, 同館管理人に多くを教わった. なお, 山田奉行の役所跡はすべて現在伊勢市の市内にある.
- 98 「台徳院殿御實紀」卷九(前掲『新訂増補國史大系 第三十八卷 徳川實紀 第一篇』477～478頁).
- 99 中村孝也『新訂徳川家康文書の研究 下巻之一』日本学術振興会, 1960年, 1980年新訂), 696～699頁. 藤井讓治『徳川家康』(吉川弘文館, 2020年), 344頁. 城戸久「名古屋城本丸殿舎建築私考」(『美術研究』第116号, 1941年8月, 14～25頁)の15頁も参照.
- 100 長安系奉行の一人である米津清右衛門正勝は, 長安の死の一週間後, 5月2日に属吏の取賄により阿波国に配流となり, 翌慶長19(1614)年2月22日, 「かねて大久保石見守長安に親しみ, 奸曲ありし事露見する故」をもって阿波国撫養の流謫先で生害させられている. これは『徳川実紀』第一編621～622, 653頁の表現だが, そこに示された出典の記事との間にずれがあるという. 長安事件については, 「死後一〇日で重大な不正が結論されるほどの調査がすませられ, さらにその一〇日後には諸子や下代共が預けられ, さらに五〇日で遺子七人の切腹という事態の進行の異常な速さは, 長安疑獄が死去以前からはじまっていたらしいことを推察させるし, 一方清右衛門の流罪という処分は手代の取賄によるという理由にしては重すぎるように思われるので, このときの処分がすでに長安疑獄と関係があったのかも知れない. あるいは清右衛門の第一次処分にいたる訴訟が長安疑獄の引き金になったのかも知れない」と林基は見ている(林基「奥州・江戸間内陸舟運路の初期段階(四)——今村仁兵衛の巴川通船を中心に——」『専修史学』第19号, 1987年11月号, 97～123頁, とりわけ98頁, 108～112頁).
- 101 『大日本史料』慶長18年4月25日条; 『新編甲州古文書』263, 473, 821, 1097, 2190号文書; 村上直「大久保石見守長安と甲斐」; 白川部前掲論文, 52頁.
- 102 野田成方『裏見寒話』卷之壹(宝暦中)(『甲斐叢書』第六卷, 10頁). 年代著者不詳の『峡中舊事記』(『甲斐叢書』第二卷, 327頁)や『甲斐國歴代譜』(同上書279頁)にも, 「同十八癸丑年より元和九年迄十一ヶ年, 一國奉行日向半兵衛, 島田清左衛門兩人, 御城番は武川十二騎也」といった記述がある. 『山梨県史資料編8近世1 領主』188～193, 348～350頁には, 慶長19年12月19日の島田直時・日向正成連署証文(454号文書), 元和3巳(1617)年12月25日付けの日向正成証文案(455号文書), 年未詳5月24日付けの身延本院宛て日向正成書状(456号文書), 年未詳6月20日付けの島田・日向宛て江戸幕府奉行人連署書状(457号文書), 八田村市佑宛て年未詳7月28日付けの日向正成書状(458号文書), 寛永3寅(1626)年5月24日付け岩波・秋山・石原宛て忠長奉行人連署書状(461号文書), 寛永8(1631)年?8月8日付け府中八幡神主宛て天野清定・日向政之連署書状(463号文書), 同日付け二宮神主宛て天野・日向連署書状(464号文書), 慶長20(1615)年卯3月11日付け島田・日向宛て江戸幕府老中連署状写(617号文書), 同年4月2日付け日向正成・島田直時連署知行書立写(618号文書), 同年3月11日付け本多上野介宛て幕府老中連署状写(619号文書), 同年卯月2日付け日向正成・島田直時連署状写(620号文書)などが掲載されている.

- 103 『甲斐國志』卷之九十六(『甲斐叢書』第十二卷, 1313頁)に「日向五兵衛可加」の項があり、「半兵衛本州ノ奉行タル時名代トシテ甲府ニ在リシ人ナリ蓋シ族人ナルヘシ」とある。また、延宝9(1681)~天和2(1682)年の「甲府徳川家勘定方諸事書留」中にも、延宝九酉年六月二日の項に、「平岡次郎右衛門手代 日向三左衛門 印」が登場する(『山梨県史資料編8 近世一 領主』473頁, 資料655)。
- 104 武徳編年集成に基づき、『干城録』(前掲43頁)に記載されている。「台徳院殿御實紀」卷二十では、慶長17(1612)年の項に「日向半兵衛政成銃手五十人を預る」(『新訂増補國史大系 第三十八卷 徳川實紀 第一篇』, 605頁)と記載されている。同卷廿四(第一篇641頁, 慶長十八年「是年」の項)にも同様の記述がある。
- 105 この事件について、豊臣方による家康への呪詛という主張は、徳川方による言いがかりではなく、当時の学者も認めた事実だという説が最近強いが、この事件以前に徳川家が学者たちに圧力をかけていたため、後者は反論できるような状況になかったという説もある。いずれにせよ、その程度の「呪詛」を口実に、全国の大名を動員して豊臣家を滅ぼそうとしたこと自体が強引であるように思われる。
- 106 土屋知貞私記に基づき、『干城録』(前掲43頁)に記載されている。『柳營補任』卷之十「同鉄炮與力六騎 同心三十人」(先手鉄炮頭)の筆頭に、「家康公様大坂供奉 日向半兵衛正成」の名がみえる(東京大學史料編纂所編『大日本近世史料 柳營補任三』東京大學出版會, 1964年, 1983年覆刻, 28頁)。また、「台徳院殿御實紀」卷廿八の慶長19(1614)年10月11日の項で、家康に御供した一万余人の中に、永井直勝らと共に、日向半兵衛政成の名も見える(『新訂増補國史大系 第三十八卷 徳川實紀 第一篇』691頁)。当然帰途も同様に彼らは家康を護衛していたと見られ、亀山~桑名の「路次坂ノ下山茂路内、鉄炮衆二百人入らしめ給う。日向半兵衛、嶋田清左衛門直時下知と云々」と慶長廿(元和元)年乙卯正月六日の「駿府記」の記事に見える(「武徳編年集成」では鈴鹿山としている)(小野信二校注『戦国資料叢書6 家康史料集』人物往来社, 1965年, 176~177頁)。これをふまえてか、池波正太郎の小説『真田太平記』(十一)(新潮文庫, 1988年, 2005年改版, 原本1982年, 83頁)では、大坂冬の陣の後、家康が日向らに警護されて帰国する記述がある。
- 107 「寛政時代巡見使通行の節、州史の撰述して進覧したる書」である『甲州巡見通行記』(『甲斐叢書』第二卷, 364~365頁)による。
- 108 『駿府記』慶長19年12月11日条(『當代記 駿府記』続群書類従完成会, 1995年, 288頁; 小野信二校注『戦国資料叢書6 家康史料集』人物往来社, 1965年, 167頁; 『大日本史料』第12編之16, 810~811頁); 「台徳院殿御實紀」卷卅二(『新訂増補國史大系 第三十八卷 徳川實紀 第一篇』748頁, 慶長19年12月11日条); 白川部前掲論文, 52頁。なお、同月初頭には大工中井大和守正次が茶臼山御營落成を家康に告げたが、この本陣の構造奉行は島田清左衛門直時と日向半兵衛政成であった(『台徳院殿御實紀』卷卅二, 前掲『新訂増補國史大系 第三十八卷 徳川實紀 第一篇』741頁)。
- 109 「武徳大成記、寛永系圖」に基づき、「台徳院殿御實紀」卷卅四(黒板勝美編『新訂増補國史大系 第三十九卷 徳川實紀 第二篇』吉川弘文館, 1930年, 1998年新装版, 6頁)がそのように記載している。なお、同卷五十二には、政次が元和六(1620)年正月廿八日に秀忠との初見を果たしたことが、寛永系圖に基づき記載されており(『新訂増補國史大系 第三十九卷 徳川實紀 第二篇』186頁)、寛永十六(1639)年十一月十日には家光にも「初見の禮」をとることが許されている(『大猷院殿御實紀』卷四十二, 『新訂増補國史大系 第四十卷 徳川實紀 第三篇』159頁)。これ以後のことは、後の注で記す。
- 110 「台徳院殿御實紀卷卅五」(『新訂増補國史大系 第三十九卷 徳川實紀 第二篇』11頁)。
- 111 翁物語に基づいて、『東照宮御實紀附録』卷十五(黒板勝美編『新訂増補國史大系第三十八卷 徳川實紀 第一篇』吉川弘文館, 1929年, 1998年新装版), 267頁が紹介している。大石学・佐藤宏之・小宮山敏和・野口朋隆編『現代語訳徳川実紀 家康公伝4 逸話編 関ヶ原と家康の死』(吉川弘文館, 2011年, 121~122頁)に現代語訳がある。紀伊国物語に基づいて、『干城録』43頁にも同話が載っ

- ており、司馬遼太郎も『城塞』中巻（新潮文庫、2002年）、299頁で紹介している。なお、大坂の陣について記した「土屋忠兵衛知貞私記」（『續々群書類従』第四史傳部、國書刊行會・内外印刷、1907年、374～403頁）には、上記のように「御先鐵炮」として「百挺 山岡主計 同 日向半兵衛」らの名が挙がっている（380頁）が、それに加えて、南部家家老であったが同家から去り大坂城へ籠城した南部十左衛門の項に、五月「七日ニ落於勢州松坂日向半兵衛生捕ル差上ル南部被下南部首ヲ刎」（396頁）という記述もある。半兵衛は落武者狩りでも活躍したようである。
- 112 「台徳院殿御實紀」卷四十九（『新訂増補國史大系 第三十九卷 徳川實紀 第二篇』、158頁）、横田尹松も持筒頭・使番となっている。
- 113 「慶長十八年足輕五十人預ル 按スルニ此年ヨリ本州ノ奉行ナリ 元和四年加増甲州國分村、末木村、下蘆澤村、合千石 按ズルニ此年ヨリ忠長卿ニ附屬」（『甲斐國志』卷之九十六『甲斐叢書』第十二卷、1313頁）。「先手頭日向半兵衛政成。大番朝比奈彌左衛門資重。曲淵清兵衛吉門は國松君につけられ」と、「台徳院殿御實紀」卷五十一は元和五（1619）年の項で述べている（『新訂増補國史大系 第三十九卷 徳川實紀 第二篇』182頁）。
- 114 同時代史料によれば、家光は何度か弟忠長に忠告をしたが、弟はそれに従わなかったらしい。寛永八（1631）年「駿河大納言忠長卿身のふるまひ凶暴にして」、「忠長卿は家司烏居淡路守成信が所領甲州の内に蟄居し。病癒るまで養生せよと命ぜられ。宣正は御勘気ゆりて駿府に赴き。家國の政を沙汰すべしと仰付られ」…「三枝伊豆守守昌。屋代越中守忠正。興津河内守直正。天野傳右衛門清宗。大久保將監忠尚。内藤仁兵衛政吉。日向半兵衛政成。村上三右衛門吉正は交代して甲府を守り。渡邊監物忠。松平壹岐守正朝。松平志摩守重成。朝比奈彌太郎泰勝四人の大番頭は。駿甲兩府にかはるがはる勤番すべしと仰付らる。（東武實録、江城年録）」（『大猷院殿御實紀』卷十七、『新訂増補國史大系 第三十九卷 徳川實紀 第二篇』512～513頁）。翌年十月「廿三日大納言忠長卿封地収公あるにより。駿遠へは請取の御使として永井信濃守尚政。松平右衛門大夫正綱命ぜられ」（同卷廿一、570頁）、十一月「十六日駿河亞相の家士みな配流せらる」。「そのほかかしこにつけられし徒は。武蔵。相摸。伊豆の内に蟄居せしめられ」た（同卷廿一、573頁）。この忠長の凶状を描いた小説が、南條範夫『駿河城御前試合』（徳間文庫、1993年）であり、そこに日向半兵衛も駿河藩武芸師範（一刀流師範日向半兵衛正久、139頁など）、甲府城奉行（日向半兵衛正之、224頁）として登場する。この小説は幾度か漫画化されており、山口貴由『シグレイ』全15巻（秋田書店チャンピオンREDコミックス、2004～2010年）、森秀樹『腕 KAINA～駿河城御前試合～』第二巻（リイド社SPコミックス、2012年）などに日向半兵衛正久・正之が登場する。
- 115 「大猷院殿御實紀」卷卅二（黒板勝美編『新訂増補國史大系 第四十卷 徳川實紀 第三篇』吉川弘文館、1930年、1998年新装版、33～34頁）に「日記」に基づいて、日向らが「召かへさる」と記載されている。
- 116 北島正元校訂『武蔵田園簿』（近藤出版社、1977年）所収の1650年頃の郷帳による（196、204、208～209、245頁）。小浜村と五明村は単独知行だが、榛沢郡と児玉郡の知行は2給、四間在家村は3給である。杓掛村234石4升、岡村845石4斗7升・山役金4両、下真下村286石8升、小浜村526石5斗8升、四間在家村110石2斗4升、五明村692石5斗7升が武蔵国における日向家所領であった。
- 117 丑木幸男「上野国寛文郷帳諸写本の検討」（『史料館研究紀要』23号、1992年3月、71～128頁）。丑木幸男編『上野国郷帳集成』群馬県文化事業振興会・朝日印刷工業、1992年、75、112、164頁）。寛永10（1633）年2月7日には地方直しが行われ、1000石以下の旗本に200石を加増し、蔵米取を知行取に変える指示が出されているが（関口進・渡辺三郎「旗本領の推移とその特色」『群馬県史通史編4近世1』群馬県・朝日工業印刷、1990年、393頁）、この政策と関連はあるだろうか。多胡村については群馬県史編さん委員会編『群馬県史資料編9近世1 西毛地域1』（群馬県・朝日印刷工業、1977年）、1047頁以降も参照。1668年時点では、嶋野村307石4斗4升、田子村81石5斗9升9合、邑楽郡389石3升9合が、上野国における日向家所領であった。
- 118 山梨県立博物館監修、海老沼真治編『「山本管助」の実像を探る』（戎光祥出版、2013年）；平山優

「武田家臣山本管助の実像——「真下家所蔵文書」と「山本家文書」の発見——」（安中市学習の森ふるさと学習館編『西上州の中世——安中市の中世文書——』朝日企画，2010年，116～123頁）。前者には多くの史料が収録されており，「14 五左衛門覚（沼津山本家文書）」（172～173頁），「20 日向盛庵書状（沼津山本家文書，寛永十年六月廿一日）」（177頁），「山本家系譜（真下家所蔵文書，寛永十二乙亥九月十日）」（203，204頁）に日向盛庵（清安）が登場する。日向半兵衛政成が盛庵と名乗ったという記述は『寛永諸家系図伝』や『寛政重修諸家譜』に見えない。会津藩士日向家の祖が日向齊庵，栖安という事実との関連が私には気になる。なお，平岡家は代々甲斐代官を輩出している。

- 119 福永酔剣『日本刀大百科事典』第4巻（雄山閣，1993年），249～250頁。
- 120 この内藤氏は永井尚政室の姉妹と思われる（『寛政重修諸家譜』巻第八百十三「内藤氏」，新訂第十三巻226～230頁，特に227頁）が，内藤家は徳川家臣であり，縁組が1582年以前に可能であったとは思えない。なお，前掲『稿本 藩士名寄』一一八さノ五家譜＝尾張藩士三枝家家譜によれば，日向大和守源昌時の妻が内藤氏とされており（一五八），半兵衛との関係が気になるところである。
- 121 横田甚五郎は甚右衛門尹松である。「編年集成天正壬午九月廿五日ノ記ニ横田甚五郎ノ妹婿日向傳治郎」という記述があり（『甲斐國志』巻之九十六『甲斐叢書』第十二巻，1313頁），『干城録』でも同様の記述があることは既にふれたとおりであるが，1582年時点で縁組をしていたかどうかには再検討の余地がある。『甲斐國志』に，続いて「日向平兵衛」の項があり，「身延過去帳廿一日華光院殿日耀日向半兵衛妻 ト見エタリ」（同頁）とあるのは，誤字だろうか。
- 122 もっとも，『寛政重修諸家譜』巻六百十九の永井氏系譜（新訂第10巻270頁以降）では，永井尚政の女子の中に日向半兵衛室は見えない。ただし，母は某氏とのみ書かれた女子が2人おり（274頁），そのいずれかが日向家に嫁いだ可能性もある。なお，永井尚政室は内藤修理亮清成の女子である（273頁）。豆田誠路編『歴史系企画展 碧南が生んだ戦国武将永井直勝とその一族』（碧南市教育委員会文化財課，2012年，2019年増訂）も参照。
- 123 徳川綱重は言うまでもなく，家光の子，家宣の父であり，甲斐を領有した。日向成澄は男子に恵まれなかったようで，兄政次の孫（正知の三男，母は某氏）甚四郎正容を養子とした。寛文元（1661）年の「甲府黄門次郎様臣下録」（『山梨県史資料編8 近世1』1998年，400～424頁），422頁に，「小普請 伊与田権左衛門組支配」として「高四百四拾俵 日向甚次郎」の名がみえる。また，「甲府殿御分限帳」（『甲斐叢書』第七巻，甲斐叢書刊行会，1935年，249～284頁），281頁に，「小普請 伊與田権左衛門支配」として「四百四拾俵 日向甚四郎」の名がみえる。
- 124 彼女は嫁ぐ前に大奥に仕えたと記載されており，たぶん『五島編年史』272頁に登場する於りうであろう。
- 125 現在の京華スクエア北側のビル辺りである。ここに延宝年中（1673～81）には日向半兵衛が，元禄年中（1688～1704）には傳右衛門が住んでいた（朝倉治彦解説・監修『江戸城下変遷絵図集』第7巻，原書房，1986年，33，35頁）。延寶3（1675）年の武鑑にも，鷹羽の家紋と共に，「三千八百石 日向半兵衛殿 北八丁ほり二丁め」（13頁）（『大武鑑』第一巻）とある。元禄四（1691）年の『本朝武系當鑑』33頁にも，「父半兵衛 三千石 八丁ほり 日向傳右衛門 與力同心右同斷」と書かれている（『大武鑑』第二巻）。『柳營補任』巻之八「同筒」（持筒頭）の中に，「萬治三子正月廿九日御先手ヨリ 延寶五巳四月七日御免 日向半兵衛正成」（『大日本近世史料 柳營補任二』234頁）という名が横田尹松，横田述松と並んであるが，二代目半兵衛政次のことか。同巻之十「同鉄炮 與力六騎 同心三十人」（先手鐵炮頭）の中には，「慶安三寅十二月十五日御書院番ヨリ 萬治三子正月廿九日御持頭 日向半兵衛政次」の名がみえる（同三，51頁）。既に家康～家光への初見の禮については以前の注で記したが，正次はその後，御書院番士となり（寛永十七＝1640年三月十九日，「この日書院番に入者廿一人」，「大猷院殿御實紀」巻四十三，『新訂増補國史大系第四十巻 徳川實紀 第三篇』176頁），父の遺跡を継いだ（寛永二十＝1643年十二月七日，「父死して家をつぎ」，同巻五十五，338頁。このように，個人名が登場しない場合には，以後『徳川實紀』からの引用を省略する）。その後，正

保四(1647)年十二月三日には、「大坂目付にさゝれし使番眞田長兵衛幸政。書院番日向傳右衛門政次」…「いとまたまふ」(「大猷院殿御實紀」巻六十八, 509頁)とあり、「大猷院殿御實紀」巻七十九によれば、慶安三(1650)年十二月十五日、「書院番日向傳右衛門政次。小姓組太田善大夫吉次。大井新右衛門政景。伊東右馬允政勝共に先手頭になり」(679頁)とあり、翌年八月十六日には、「近日將軍宣下あるにより」布衣着する事を許さるゝ者五十二人」の中に、彼らの名も見える(「嚴有院殿御實紀」巻二, 第四十一巻 24頁)。政(正)次は明暦元(1655)年十月八日の「韓使引見」の際には渡邊綱治と大手門前を警衛し(同巻十, 161頁)、萬治三(1660)年正月廿九日には持筒頭になった(同巻十九, 343頁)。この後、寛文五(1665)年十二月十二日の次男傳七郎某ら廿七人の初見の禮の記事から彼は「持筒頭日向半兵衛正次」と書かれるようになり(同巻三十一, 555頁)、延寶五(1677)年三月七日病免となった(同巻五十四, 第四十二巻, 256頁)。延寶五年九月廿五日、「日向半兵衛正次致仕し。長子小姓組傳右衛門正知家つき。半兵衛正次に養老料三百俵下され」た(「嚴有院殿御實紀」巻五十五, 268頁)。京華スクエア前の案内板によれば、八丁堀は江戸初期の埋め立てにより寺町となったが、1635年の江戸城下拡張工事計画により玉円寺以外の寺が郊外に移転され、与力・同心組屋敷の街となったという。なお、海老沢泰久の小説『無用庵隠居修行』(文春文庫, 2010年)の主人公日向半兵衛(18世紀)は、海老沢が創作した虚構の旗本である。

- 126 「嚴有院殿御實紀」巻十八の萬治二(1659)年七月十一日の項の、「この日万石以上以下の子弟等召出され。兩番に加へらるゝもの」の中に、「日向傳右衛門正次長子傳藏正知」を始め百九十二人の名が挙がっている(『新訂増補國史大系第四十一巻』313～314頁)。『柳營補任』巻之八の「同筒 與力十騎 同心五十五人」(持筒頭)の中に、(元禄)「同七戌六月廿八日御先手ヨリ 同八亥十一月十五日辭 日向傳右衛門正知」(東京大學史料編纂所編『大日本近世史料 柳營補任二』東京大學出版會, 1963年, 1983年覆刻, 229頁)、同巻之十「先手鐵炮頭」の中に、「貞享四卯六月九日御小性組十番明キ組ヨリ 元禄七戌六月廿八日御持頭 日向傳右衛門正知」(同三, 40頁)の名が見られる。
- 127 貞享元(1684)年八月十日、「使番中坊長兵衛秀時。小姓組日向傳右衛門正知。春宮御所構造の奉行命ぜられ暇たまふ。勘定の徒も同じ」(「常憲院殿御實紀」巻十, 『新訂増補國史大系 第四十二巻 徳川實紀 第五篇』520頁)。九月三日「東宮御所營作にまかる輩に薄書料を下さる。使番中坊長兵衛秀時。小姓組日向傳右衛門正知金百兩づゝなり」(同巻十, 同第四十二巻 523頁)。翌年三月十五日「使番中坊長兵衛秀時。小姓組日向傳右衛門正知并に勘定の徒は。東宮御所の營作畢て京よりかへり」…「ともに拝謁す。(日記)」(同巻十一, 542頁)。四月「十六日 春宮御所構造にあづかりたる使番中坊長兵衛秀時。小姓組日向傳右衛門正知に金。時服給ふ。其他勘定。徒士等。金銀下さるゝ事差あり」(同巻十一, 544頁)。彼は貞享四(1687)年六月九日、猪飼正冬と共に先手頭となり(同巻十五, 602頁)、十二月廿五日、「布衣ゆるさるゝ者廿三人」の一人となった(同巻十六, 621頁)。元禄七(1694)年六月廿八日、彼は持筒頭になり(同巻廿九, 第四十三巻 202頁)、翌年十一月十四日病免となった(同巻卅二, 243頁)。
- 128 幕府財政立て直しと旗本困窮救済を目的として元禄10(1697)年7月26日から一年かけて行われた、元禄地方直しによる知行割り替えの一環であろう(前掲関口・渡辺「旗本領の推移とその特色」398頁以降)。村名は『静岡県史資料編9近世一付録 郷帳』(静岡県・ぎょうせい, 1992年)所収の『元禄郷帳——駿河国郷帳』(元禄十五壬午(1702)年十二月), 223～228頁による。この時点では、加嶋松本村は「御料所」・曾我播磨守との相給、十兵衛村・加嶋十兵衛村は石川又四郎との相給(224頁)、久沢村は日向喜之助との相給、入山瀬村は曾我播磨守との相給(226頁)、椎路村は日向喜之助との相給(228頁)である。安永7(1778)年の用水訴訟の際には、入山瀬村は日向六之丞知行所、久沢村は日向治郎八知行所となっていた(富士市史編纂委員会編『富士市史 上巻』富士市, 1969年, 703頁)。『富士市史』にはこのほか、舟橋人足や川除紛争の事例も紹介されている(次号)。同下巻(1966年)27頁には幕末とみられる松本村辺りの相給を示す村絵図が掲載されている。

傳次郎正方は元禄四(1691)年十二月二日「御家人の長子等召出さる」時に正知の子として召し出され(「常憲院殿御實紀」巻廿四, 黒板勝美編『新訂増補國史大系 第四十三巻 徳川實紀 第六篇』

- 吉川弘文館, 1931年, 1999年新装版, 126～127頁), 喜之助正茂も元禄八(1695)年八月五日, 召し出され近習番(同巻卅二, 237頁), 次いで元禄十(1697)年四月廿二日, 小納戸を命じられている(同巻卅五, 294頁). 元禄十一(1698)年十二月十八日, 「寄合日向傳右衛門正知子書院番傳次郎正方」…「父死して其子家つぐ者四十人. 傳右衛門正知は三千八十四石餘の内. 二男小納戸喜之助正茂に千石」…「分つ.(日記)」(同巻卅八, 352～353頁). 元禄十三(1700)年八月廿五日, 正茂は小普請に入った(同巻四十二, 414頁). ところが享保二(1717)年正月, 地震や失火が続く中, 「廿二日申刻小石川馬場の側より失火し. 本郷. 駿河臺. 小川町. 神田より郭内にうつり. 本町. 石町. 日本橋より深川に及べり. 評定所. 公卿の旅館. 神田橋. 鍛冶橋焼失す. 万石以上の邸宅七十二. 見參の士の居所三百四十九焼亡す. 其他市井のごときは書するにいとまあらず」(「有徳院殿御實紀」巻四, 第四十五卷54頁)という状況になり, 二月朔日「さきに諸國巡視せし使番會我平次郎長祐. 小姓組日向左京正茂. 書院番小笠原八右衛門長方. 居宅焼失せしをもて. その事ゆるされ. 使番有馬内膳純珍. 小姓組天野傳兵衛矩重. 書院番小菅猪右衛門正親もて. これにかへしめらる.(日記)」(同巻四, 56頁)という事態に至った.
- 129 元禄郷帳はこの後の領分付けを記している. 『資料編10』の付録には, 天保6(1835)年の駿河国絵図もあり, 村の位置関係がわかる.
- 130 靱負正容は養父成澄の後を継いで, 桜田館で家宣に仕えたが, 宝永元(1704)年家宣が綱吉の養子として西の丸に入った際, 御家人に列し, 廩米440俵を得て小普請となった. 翌年10月晦日, 彼は8月22日に亡くなった兄正方の養子として遺跡を継ぎ, 廩米支給は停止された. 一応正徳二年(1712年)のものと思われる御家人分限帳(鈴木壽校訂『御家人分限帳』近藤出版社, 昭和59=1984年)では, 「御小性組」の「十番 土井豊前守組」の中に, 「一式千八拾四石余 駿河 半兵衛養子 伝右衛門子 日向靱負 西二十」(154頁)の名がみえる. 享保6(1721)年時点での彼の屋敷は, 築地三丁目の, 現在駅前のカフェになっているあたりにあった(朝倉治彦解説・監修『江戸城下変遷絵図集』第8巻, 原書房, 1986年, 7頁).
- 131 日向次郎八郎正英の三男で, 母は日向左京正章の娘である. 22歳で「正房が終にのぞみて養子となり, 其女を妻とす」.
- 132 「實は成瀬彌五郎正辰が女. 正房にやしなはれ正道が妻となる」.
- 133 「上総一宮加納家家譜」(三重県編『三重県史資料編近世2』ぎょうせい, 2003年, 329～342頁), 333頁. 加納久周は大岡(三浦)忠房の子孫であり, 加納久堅の養女の婿となっている. 大岡忠房は大岡越前守忠相の祖父の兄弟である(『寛政重修諸家譜』巻第千六十一, 新訂第十六卷304頁以降). 『柳營補任』巻之九「中奥番」の中に, (天保15=1844年寅正月11日)「同日同高力丹波守組ヨリ 嘉永五子十二月十日御留守居番 高貳千八十四石 日向七郎 半兵衛」(『大日本近世史料 柳營補任二』289頁), 同巻之十三「留守居番」四番組の中に, 「嘉永五子十二月十日中奥御番ヨリ 同六丑十二月十九日卒 日向半兵衛」(同三, 259頁)の名がみえる.
- 134 小川恭一編著『寛政譜以降旗本家百科事典』第四巻, 東洋書林, 1998年, 2276頁. 日向半兵衛邸の一つは嘉永～安政時代, 現在の清澄白河駅からほど近い, 江戸と千葉を結ぶ小名木川沿いの東深川橋付近に, 深川海辺大工町や館林藩邸に囲まれて存在した. もう一つは, 神田神保町の西神田コスモス館にほど近い場所(書道関係のビル辺り)にあり, 嘉永2(1849)年の切絵図には日向七郎, 安政6未(1859)～文久元酉(1861)年の切絵図には日向小傳次の名がみえる(朝倉治彦解説・監修『江戸城下変遷絵図集』第3巻, 原書房, 1985年; 市古夏生・鈴木健一編『江戸切絵図集(新訂江戸名所図会別巻1)』ちくま学芸文庫, 1997年, 025, 031～032頁). 「温恭院殿御實紀」安政元(1854)年三月四日の項に, 家督相続者として「松平伊豫守組 御留守居番 半兵衛實子惣領 日向傳之助」らの名が見え, 老中列座のもと, 菊之間でつががなく認められたようだ(黒板勝美編『新訂増補國史大系第五十巻 續徳川實紀 第三篇』, 吉川弘文館, 1935年, 1999年新装版, 148頁)が, これが小伝太であろうか. 日向小伝太は新政府軍に早い時期に投降し, 誓詞奉答を行い, 本禄下賜を受けている(爾見軍治『三河国加茂郡の明治維新——旗本知行村の消滅過程と地租改正——』東名印刷, 2008年;

- 太政官編『復古記 第九冊 (東京帝國大學藏)』内外書籍, 1929年, 386～387頁).
- 135 リニモのターミナルのある八草である。八草村の名主荒川家がこの地域の日向家陣屋役人を務めた
が、会計疑惑で解任されている(1811～12年)(豊田市教育委員会豊田市史編さん専門委員会編『豊
田市史 二巻 近世』豊田市・大日本印刷, 1981年, 464～466頁;足助町誌編集委員会編『足助町
誌』愛知県東加茂郡足助町・長屋印刷, 1975年, 314頁)(次号)。その他の村の中には、天保7
(1836)年の加茂一揆に加わった村もあるが、領主制批判はしていないようだ(同上書, 632～633
頁)。
- 136 木村礎校訂『旧高田領取調帳 中部編』(東京堂出版, 1995年), 58～63, 189頁。これは明治十
(1877)年前後の状態を記載したものらしい。巽俊雄「三河に知行地を持った旗本家一覧」(1)～(3)
(『愛知大学総合郷土研究所紀要』第45～47号, 2000～2002年)も参照。明治初年の「雛田領」中
比奈村を示す村絵図が富士市史編纂委員会編『吉原市史 上巻』(富士市・図書印刷, 1972年), 647
頁にある。
- 137 190～195頁。
- 138 富士市立博物館館蔵品展パンフレット『駿河の大地主松永家の百年』(2001=平成13年)。この博物
館のある広見公園には、松永邸の一部が移築されている。もともとこの屋敷があった富士市平垣本町
には金正寺があり、松永家の墓碑が並んでいる。そのうちの一基、瑞松院慈徳省耕大居士の墓碑銘に
は、「君諱正方姓松永氏通稱安兵衛後改省耕父曰安貞母植松氏文化十四年二月二十一日生于駿河國富
士郡平垣郷天保七年地頭日向氏以君管理七郷」…とあり、1836年に日向氏が松永安兵衛正方(省耕)
に富士郡7村の管理をゆだねたことがわかる。
- 139 現在の箱崎IC付近であり(中央区日本橋蛸殻町一丁目)、享保から安永にかけて日向左京が、文化5
辰(1808)年には日向次郎八郎が住んでいる(朝倉治彦解説・監修『江戸城下変遷絵図集』第6巻,
原書房, 1985年, 121, 123, 125頁)。元禄十七年・寶永元年(1704)の『正統武鑑』5頁の「御小納
戸衆 布衣」の項と、6頁の「御次御番衆 御役料三百俵ツ」の項に「日向喜之介」の名がみえる
(『大武鑑』第三巻)。一応正徳二年(1712年)のものと思われる御家人分限帳(鈴木壽校訂『御家人
分限帳』近藤出版社, 昭和59=1984年)では、「御小性組」の「四番 鈴木能登守組」の中に、「一
千石 駿河 伝右衛門子 日向左京 西二十六」(139頁)の名がみえる。
- 140 正英は安永8(1779)年9月8日、駿府城の守衛として52歳で亡くなっており(法名日進)、駿府の
感應寺に葬られた。東京大学史料編纂所編『大日本近世史料 柳營補任一』(東京大学出版会, 1963
年, 1983年覆刻), 260頁の「柳營補任」巻之四「御書院番與頭」一番組の中に、「安永四末二月十一
日同組ヨリ 同五申四月日光御供 同八亥九月八日卒 日向次郎八郎正英」の名が見られる。「湊明
院殿御實紀」巻三十一の安永四年二月十二日の項に、「書院番日向次郎八郎正英組頭となる。(日記)」
(黒板勝美編『新訂増補國史大系第四十七巻 徳川實紀第十篇』吉川弘文館, 1935年, 1999年新装版,
460頁)とあり、同巻三十四の徳川家治の日光社参の際には、彼は宇都宮城(安永五=1776年四月十
五日, 504頁)と古河城で宿直を命じられている(四月十九日, 509頁)。安永八年十二月八日、「書
院番組頭日向次郎八郎正英が子鐵太郎正肥」を始め「父死して。其子家つぐ者八人。(日記)」(同巻
四十一, 617頁)という記事があり、子息が無事に家を継いでいる。
- 141 神奈川県企画調査部県史編纂室編『神奈川県史資料編8近世5上 旗本領・寺社領1』(神奈川県弘
済会・大日本印刷, 1976年)。大畑村には、『柳營補任』巻之十六「拂方 御納戸組頭」に名が見える
(四巻143頁)、日向孫大夫の知行もある。『資料編6近世3』付録の相模国地図で位置関係もわかる。
- 142 木村礎校訂『旧高田領取調帳 関東編』(近藤出版社, 1969年), 31～32頁。木村礎校訂『旧高田
領取調帳 中部編』(東京堂出版, 1995年), 205～220頁。
- 143 家臣人名事典編纂委員会編『三百藩家臣人名事典』(新人物往来社, 1987～89年)の記述が『五島
編年史』へと私を導いてくれた。
- 144 中島功『五島編年史』(国書刊行会, 1973年), 272頁。正春の妻については273, 332頁を参照(『寛
政重修諸家譜』巻第百八十六(新訂第三巻377頁)「五嶋氏系譜」によれば、母は某氏である)。主膳

某，民部盛清はその弟である。

- 145 五島盛利は17代盛定の子宇久盛重の孫であり，盛定のひ孫20代純玄の後，その叔父大浜（五島）玄雅が21代を継いだ際，彼の養子となり，22代当主となった。これに対して，大浜主水は五島玄雅に召し抱えられて家老になった烏山与四兵衛の子で，玄雅の子玄宗の養子となり，盛利の妹孝子を妻としていた。こうして2人の対立は，藩を二分する対立となった（長崎県史編集委員会編『長崎県史藩政編』吉川弘文館，1973年，581頁以降）。
- 146 『五島編年史』298～299頁。民部盛清はこのとき柳間交代寄合の旗本となり，また在地の事情に詳しくあったことから，反盛利派・外様・中層藩士を重用して譜代家臣を牽制した（『長崎県史藩政編』606頁以降）。
- 147 『五島編年史』325頁。『長崎県史藩政編』610～611頁には，4月27日付けの起請文が転載されている。奥平美作守忠昌は五島盛勝の舅で，盛暢の祖父である。
- 148 『五島編年史』326頁。
- 149 同上書332頁。延宝7（1679）年の富江領主五島民部盛清死去に当たり，その姉婿として日向惣左衛門が老中に，盛清の重病であることを告げ，12月6日老中大久保忠朝からの内意を受けて，盛清の子武助（盛朗）の家督については福江藩主五島盛暢から願い出ることとし，11日に武助名代の日向と盛暢が同道して登城し，老中列座の下で，武助による盛清の跡式と三千石の継承を認められ，以後盛暢が武助を導くよう幕府から命じられた（『五島編年史』432頁）。
- 150 ここまで，同上書365頁。
- 151 同上書272～273頁。元禄4（1691）年の『本朝武系當鑑』39頁の「御廣敷御番頭」の項に，五組10人の名が並んでおり，その四に美濃部文左衛門と並んで「五百石 四 日向惣左衛門」の名がみえる（『大武鑑』第二卷）。『柳營補任』卷之十四「小十人組頭」五番組に，「寛文六年二月十八日 貞享五辰五月十三日御廣敷番之頭 日向惣左衛門」（『大日本近世史料 柳營補任三』，351頁），同卷之十五「廣敷番之頭」の項に，（元禄十丑＝1697年）「同日小十人戸田喜右衛門組頭ヨリ 同十四巳八月廿一日願御免 日向惣右衛門」（同四，39頁）の名が，「同日同仁木甚五兵衛組ヨリ，後同斷 日向八郎右衛門」（40頁，同日とは寶永七寅＝1710年五月十五日，同斷とは後西丸にの意）と共にみえる。
- 152 『五島編年史』486頁。元禄十二年（1699）三月廿三日，「日向八郎左衛門正行」が小納戸になっているが（「常憲院殿御實紀」卷卅九，『新訂増補國史大系 第四十三卷 徳川實紀 第六篇』361頁），四月廿六日，小納戸の「日向八郎右衛門正竹」が小笠原廣員と共に新番になっている（同卷卅九，365頁）。正徳3（1713）年の『賞延武鑑』58頁の「御廣敷番頭衆 御役料百俵宛」の項に，「日向八郎右衛門 三百俵 △二はん丁」とある（橋本博編『大武鑑』卷四，1935年）。『柳營補任』卷之十五「西丸御廣敷番之頭 后大奥ト云」の項に，「同日同斷 享保三亥四月朔日御役召放 日向八郎右衛門」（『大日本近世史料 柳營補任四』，54頁）と見える。一応正徳二年（1712年）のものと思われる御家人分限帳（鈴木壽校訂『御家人分限帳』近藤出版社，昭和59＝1984年）では，「御奥方御広鋪番 一番」の2人目（3人の頭の一人）に，「一三百五拾俵 外，百表御役料 頭 半左衛門養子 五嶋淡路守子 日向八郎右衛門 子四十三」（262頁），「大御番」の「式番 酒井紀伊守組」の中に，「一式百俵 八郎右衛門養子 半左衛門子 日向半之助 丑三十」（221頁）の名がみえる。
- 153 このためか，その他の旗本日向氏（半兵衛家，左京正茂系，正久系）の家紋が「黒餅の内違鷹羽 割菱」であるのに対し，正春系の家紋は「黒餅の内違鷹羽 五松皮菱」である。元禄時代の惣八郎正竹の屋敷は赤坂にあり，現在の檜町公園の近くであるが，文久2（1862）年の日向惣八郎邸は現在の赤坂駅辺りである。その他，日向孫兵衛邸宅は延宝時代，檜町小学校辺りにあった（朝倉治彦解説・監修『江戸城下変遷絵図集』第10巻，原書房，1986年，59，65，93，119頁）。嘉永2（1849）年には日向大膳が現在の赤坂駅辺りに住んでいる（前掲市古夏生・鈴木健一編『江戸切絵図集（新訂江戸名所図会別巻1）』，108，115頁）が，嘉永5壬子（1852）年2月12日「昼九ツ時頃，赤坂新店，日向大膳屋敷，物置計焼ル也」（鈴木棠三，小池章太郎編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第五巻，

- 三一書房, 1989年, 第三十七, 嘉永五壬子年珍説集, 44頁)とある.
- 154 八郎右衛門正直は, 寛政4子(1792)年時点で, 小日向(新宿区新小川町)に屋敷を持っており, 付近を江戸川が流れていた(朝倉治彦解説・監修『江戸城下変遷絵図集』第13巻, 原書房, 1986年, 7頁).
- 155 正郷の母は細井氏であり, 正孝の母の姪である.
- 156 小川恭一編著『寛政譜以降旗本家百科事典』第四巻, 東洋書林, 1998年, 2277頁.
- 157 一応正徳二年(1712年)のものと思われる御家人分限帳(鈴木壽校訂『御家人分限帳』近藤出版社, 1984年)では, 「御書院番」の「三番 阿部遠江守組」の中に, 「一三百俵 伝三郎子 日向織部 子四十」(168頁), 「御小性組」の「二番 朽木土佐守組」の中に, 「一三百俵 織部子 日向源十郎 丑十七」(134頁)の名がみえる. 子四十, 丑十七とは, 幕府職員としての登録年度(子年, 丑年)と当該年齢(40歳, 17歳)を示す.
- 158 『寛政重修諸家譜』卷第二百五十三(新訂第四巻, 1964年), 369~386頁, 太田氏系譜参照. 半兵衛政成の女婿遠山資為は家康側室英勝院(梶・勝)の甥である.
- 159 『寛政重修諸家譜』卷第四百十八(新訂第三巻, 1964年), 162~167頁, 岩出・岩手氏系譜を参照. 正文の実家の家紋は花菱である. 文化5辰(1808)年の日向清三郎正文, 安政時代の清一郎, 文久元酉(1861)年の波之助の屋敷は, 飯田橋駅前の旧飯田町変電所, 現在のベルサール付近にあった(朝倉治彦解説・監修『江戸城下変遷絵図集』).
- 160 『寛政重修諸家譜』卷第六十(新訂第三巻, 1964年)山高氏系譜に登場するが, 江坂氏の血統である. 家紋は割菱である. 1808年(文化5年辰)の山高力蔵の屋敷は神田神保町の小栗坂(現在の日本大学経済学部の裏手)に見え, 1860年前後に西神田二丁目にあった日向小傳次屋敷に比較的近い(朝倉治彦解説・監修『江戸城下変遷絵図集』第三巻, 原書房, 1985年).
- 161 小川恭一編著『寛政譜以降旗本家百科事典』第四巻, 東洋書林, 1998年, 2276頁. 「慶喜公御實紀」慶應二(1866)年十一月十八日の項に, 遊撃隊頭取並として, 「兩番格 奥詰 同 玉田忠四郎 日向波之助」らの名が挙がっている(黒板勝美編『新訂増補國史大系 第五十二巻 續徳川實紀 第五篇』, 吉川弘文館, 1936年, 1999年新装版, 79頁).